＜中学生＞

僕の身近な戦争

第二中学校　　１年　　大　川　晃　誉

僕の祖父は昭和六年生まれです。終戦の時、13歳だったと聞いています。祖父が言うには、空襲の時、焼夷弾という火を巻き散らす弾頭がたくさん落ちてきたそうです。焼夷弾が落ちてきた所では、あちこちで火事が起こり、逃げ場がありません。「熱い、熱い。」と叫びながら祖父と、祖父の母がたどり着いたのは、今の僕の通学路沿いの子持川という川の橋の下だったそうです。その橋は、今でも変わらずあります。また、このような話も聞きました。ある時、祖父が焼夷弾から逃げようと走っている時のことです。なんと、僕が昨年まで通っていた小学校が燃えていたというのです。それは今でも目に焼きついているほどショッキングな光景だったそうです。そのことについて祖父は、「あそこは、美しいと思えてしまうほど燃えていた。」と言っていました。僕の通っていた小学校が燃えるなんて、想像がつきません。さらにショックだったのは、焼夷弾から逃げていた時、祖父は同級生が目の前で燃えているのを見てしまったそうです。僕は、もしも自分の友達が燃えていたら、あるいは自分が燃えていたら、どんなに痛いだろう、苦しいだろう、と考えました。

目の前で友達が燃えているという事実は、僕は受け入れられません。なぜ助けなかったのか、自分はどうするべきだったのか、という問題ではなく、生きるためにはいくつもの信じられない現実が当時にはたくさんあったことが分かりました。

戦争当時の祖父と僕は、ほぼ同じ歳です。戦争当時の生活と、今の平和な生活とでは、まるで違う生活だったと強く思いました。

ところで最近僕は『永遠の０』という小説を読みました。僕は歴史に興味があるので、戦国時代の武士の生き様を本から学びました。『永遠の０』の「特攻」というものが、戦国時代の武士の「切腹」と同じように思いました。なぜそんなことができたのでしょう。『永遠の０』を読んで、そして祖父の話を聞いて分かったことは、戦争を生き抜いた人達は、決して臆病者ではないということです。

祖父の時代、負けるのは恥である、国のために死ぬことが美徳とされてきたそんな中、人と人が殺し合う戦争に何の意味があるのか分からなくなるのは当然のことです。戦争とは、一体何のためにあるのでしょう。祖父の話を聞

き、小説を読んだことにより、戦争に兵士として行った人達のことも、国に残って被害を受けた人達のことも、よく理解できました。どちらもつらく悲しい戦争の被害者です。

最近の日本というと、世界で自爆テロが起こっていたり、北朝鮮の核兵器について報道されていたりと、いつ戦争がふりかかってくるか、分からない状況にあります。しかし、僕達は、おだやかな日常を毎日のんびりと過ごしています。祖父の話を聞いた後、世界のどこかで戦争を感じながら、対照的な日常を過ごしている僕達は少し危険だと感じました。

今の僕の歳の時に祖父は生きることに精一杯だったと聞きました。だから僕の祖父は食べ物を無駄にはしません。物も大切にします。古い物は修理して、ずっと使います。僕は、そんな祖父と一緒に生活できて幸せです。あの時祖父が焼夷弾から逃げて生きのびてくれたおかげで、今の僕がいます。僕が、このことを知って生きていくのは、使命のように感じます。これが僕にとっての、身近な戦争です。

伝える

第二中学校　　２年　　平　野　柴　乃

朝、せみの鳴き声で目が覚め朝食をとる。身仕度をし、バイオリンの練習を終えると12時の鐘がなる。昼食を食べ終え食器を片付けたあと、宿題を始める。疲れて休憩をとっていると、母が帰ってくる。そして夕飯を食べ、家族で団らんの時間を過ごす。このローテーションが私の毎日の基本だ。特に、何が起こるわけでもない1日。しかしそんな「当たり前」の毎日が、理想として語られる時代があったことを私達は決して忘れてはいけない。そして、そんな世の中をつくりあげた戦争を私達は2度と起こさせてはならない。

「戦争。」それは言葉では言い表すことなんてできない、とても残酷なものだった。

暗くて重い戦時中の夜空で、これまでずっと人々の足元とわずかな希望を照らし続けていたたくさんの星は、いつしか見ることができなくなった。夜空をうめつくす程の、敵機がやってきたのだ。そのことを空襲警報のサイレンで知る。このサイレンが鳴ったら避難はスピード勝負。もし逃げ遅れたら、死ぬ。そんな状況で起こった話を、私はある104歳の医師が書いた1冊の本から知ることになる。ある日の夜、病院では新しい命が誕生しようとしていた。しかし、そんな時でもサイレンは容赦なく鳴り始める。警報がでてしまった以 上、いつ焼夷弾が落ちてくるか分からない。そんな時でも、誰もその場から離れることはなかった。無事出産を終え赤ちゃんの産声が聞こえた時、立ちあった医師や看護師は泣いていたという。たくさんの人が死にゆく

中新しく誕生した命。そのかけがえのない命を救うために、何人もの人が自分を犠牲にしようとしていた。そこまでしてでも救いたかったのは、単なる仕事の使命感ではない。戦争により失われていく命ばっかりだった日々を、それを当たり前と感じてきてしまった自分達を奮い立たせるような支えが欲しかったのではないか。そして、そのたった一人の成長は周りの人々の小さな生きる希望となったのではないか。

しかし、戦争の恐怖はそれだけではない。深刻な食料不足は人々を長期間に渡って、苦しめ続けていたのだ。高価な着物と引き換えに渡された少量の米。みそ汁の上に浮かぶ決して具材とはいえない葉。この苦しさを、私達が知ることはできない。しかしそんな時でも、人々は思いやりの心を忘れることはなかった。ただでさえ足りていない食料を見ず知らずの人へあげる優しさ。自分の分の食料を食べ盛りの学生へ分ける気遣い。この戦時中の人々の心を、そして戦争の悲惨さを、私達は伝えていかなければならない。

なぜこの世界で、戦争はなくならないのか。武力で解決できる問題など、あるわけがないのに。戦争をして残るものは、数えきれない死体だけだ。負けた国は、勝った国の占領に苦しめられ、勝った国は、多くの罪のない人々を殺してしまった罪悪感に苦しめられる。そんな利益のない争いが、なぜこの世からなくなることがないのか。この疑問が解ければ、世界は確実に平和になる。しかしどんなに頭の良い人も、答えを出すことはできなかった。

私には、最も恐れていることがある。それは、これから先を生きていく人々が「戦争を忘れること」である。今の日本は、憲法により戦争をしないと約束されている。しかしこの憲法の重大さを忘れてしまった時、私達はまたあの残酷な争いを始めることになってしまう。そして人々は後悔し、次の世代へ伝えていこうとする。その繰り返しを、ここで終わらせたい。

そのために、私達は知らなければならない。苦しくて辛くて孤独だった日々を。「普通」に憧れていた時代があったことを。そして伝えなければならない。毎日、死と隣り合わせだった日々を。怖くて怖くてたまらなかった日々を。いつか来る、世界平和の日まで。

「ひめゆりの塔」から教わった

第二中学校　　３年　　中　西　遼太郎

今、平和なこの国。たった73年前まで空から雨のように落ちてくる爆弾、毎日、毎日、死と隣り合わせだった国とは、思えない。73年前は、命の尊さへの感覚が失われていたのかもしれない。

6歳の頃、僕は沖縄県にある、ひめゆりの塔へ1度だけ行ったことがある。僕は6歳の時の他の思い出などあまり覚えていない。しかし、不思議にも、ひめゆりの塔で6歳ながらに大きなショックを受けたことは鮮明に覚えている。

（暗い、怖い、爆弾の音だ……。）

資料館の中には、女学生徒たちが書いたであろう日記のようなものがあり、そこは、暗くなっていた。それと爆弾の飛び交う「ヒュ〜」という音から爆発した「ドンッ」という音に変わる。その音が無数に響きわたっていた。だから、当時の僕は、そのような思いをし、それがあまりにも衝撃だったから九年経った今も鮮明に覚えているのだと思う。

戦争などについて、歴史などの授業で学び、この齢になりその場所のことを知ってきたと思う。今になり、その話を聞くと、僕と同い年くらいの女子生徒が戦争で負傷した兵隊たちの治療を洞窟の中でしていたという。今の僕では、傷だらけの兵隊を治療することはあまりに怖くて、できない。治療、それに食事まで作る女学生徒たちは、勇気や行動力、人間性が今の自分より数倍優れていて、自分が小さく見え情けないと思った。しかし、女学生の努力も虚しく、日本は惨敗。そして米軍によるガス攻撃により、洞窟の中にいた女学生徒96人の内、87人が命を落とした。それ以外に亡くなった人は、アメリカの捕虜になるのは恥だからと、爆弾を抱えて亡くなったという事実もある。今の人たちは日本国の為に命を亡くしてもいいと言う人は全くといっていないと思う。それに捕虜になるのは恥だからといって自ら命を絶つ考えを持つ人もそう多くはいないだろう。だが、戦争前は今と同じ考えを持つ人も少なくはなかったと思う。しかし、戦争が始まったことにより、次第に人々は国に教育され、自分の意見が言えなくなり、命の尊さに対する考えが狂ってしまっていたことも事実だ。

僕たちには、この大きな過ちを後世に伝えていく義務がある。そうしなければ100年後200年後にまた、このような戦争が起き、苦しく、悲しい思いをさせることになってしまうかもしれないからだ。何より、この戦争で亡くなった多くの人たちへの償いではないだろうか。

「戦争なんて自分には関係ない。」など思っている人。「今すぐにでも死んでしまいたい。」と思っている人。それは、大きな間違いだと思う。なぜなら、戦争中に死にたくて亡くなった人などいないからだ。だから、それを簡単に口にしたり思ったりしてはいけない。

もう人を壊し、大きな悲しみをもたらす戦争を2度と起こしてはいけない。2度と。

継承

第二中学校　　３年　　依　田　隆　暉

今年は平成30年。「平成」という年号は天皇の退位により変わるとされています。今でこそ、日本は戦争がなく平和だとされていますが、日本でも戦争はありました。しかもたった73年前までです。その中でも一番日本の被害が大

きかったのが太平洋戦争です。

太平洋戦争は日本に大きな被害を与えました。戦争に動員した軍人はもちろん、民間人にも犠牲者が多く出ました。特に広島・長崎への原爆投下は、多くの犠牲者を生みました。僕は、社会の授業で戦争について勉強したり戦争についての本を読んだりするとき、戦争は2度と起こしてはならないものだと痛感させられます。ですが、時が経つにつれてその意識が薄れていく危険があると思います。「百聞は一見にしかず」という言葉があるように、戦争を経験し、その現場を見た人達の記憶と比べ、僕達が戦争について聞いて知っただけの記憶では、明らかに印象が弱いということが分かります。さらに時が経つにつれ、戦争を経験した人が減っていってしまっています。やがて戦争を経験していない人達だけの時代がやってきます。そんな時、戦争に対しての意識はしっかり残っているのでしょうか。再びあの悲劇を起こさないために僕達は何ができるのでしょうか。

そのためには、若者が戦争についてよく理解しなければなりません。でも理解するにあたって何かしらのきっかけが必要だと僕は考えます。そのきっかけの一つとして、戦争を経験した人の話を聞くということが最も印象強く心に残ることだと思います。僕は祖母から戦争についての話を聞いたことがあります。祖母は戦争経験者ではないのですが、祖父が生前中に曾祖父のことを聞いたそうです。曾祖父は戦争経験者で終戦後、戦地から帰ってきました。ですが、曾祖父は祖父が大きくなっても戦地のことは一切話しませんでした。僕はなぜ息子に戦争の経験を話さなかったのかと疑問に思いました。考えると、曾祖父にとって戦争体験はあまりにも辛い過去であったのではないでしょうか。また、祖母も終戦の年に実兄を栄養失調で亡くしていて、祖母が曾祖母から聞いた話では、「白い御飯が食べたい。」と言って亡くなったそうです。これも戦争の悲しい犠牲だと思います。こういった経験から、祖母は今も僕達が御飯を残すと「食べられない人達もいるんだよ。」と言って叱ります。このように、僕は祖母から戦争についての話を聞くことができました。

ですが、年々戦争体験について直接聞くことができるという機会は少なくなってきていると思います。そのため、他のきっかけが必要になってきます。その一つとして、ゲームやアニメ・ドラマなどを通じて伝えるという方法があると思います。今の若者にとって、戦争とは少し遠い存在なのではないかと僕は思います。だから、テレビやスマートフォンなど若者がよく使うツールを通じて伝えることで、戦争について知る意欲が湧くきっかけとなるのではないでしょうか。他にもきっかけはたくさんあると思います。若者はそのきっかけを通じ、少しでも戦争について知ること、そして、戦争を知る人は若者にきっかけを与えることが大切だと思います。

このように若者が戦争について知ることが戦争を起こさないために必要なことだと思います。また、それを僕達の世代で途切れさせるのではなく、次の世代へ伝え、また次の世代、また次の世代へと伝えなければなりません。日本が平和であるためにはどうすれば良いのか、改めて考えてみてください

平和であることの幸せ

第三中学校　　１年　　外　塚　杏　実

平成という時代がもうすぐ終わろうとしている平成30年の夏休み、私の1日はこんなふうに始まる。

「もっと寝てたいなあ。」

「朝ご飯、私の好きなゆで卵がない。チーズなんて食べられない。」

「暑いのに、クーラーがあまり効いていない。扇風機つけるのが面倒だから、弟に頼もう。ああ、今日は部活がない。暑い思いをしなくてすむ。」

テレビを見ながら、パジャマのままでごろごろしていた。つまらない普通の1日がこのまま過ぎ、平和であることの意味も分からず、退屈でたまらないと思っていた。

今年の夏は、広島へ行くと母から聞いた時も、妹とテーマパークの方がいいと話をしていた。それは、本当の平和である幸せが全く分からなかったからだ。

広島駅に着いた時でさえ、新宿みたいに人がたくさんいて、すてきなお店があり、何を買ってもらおうかなど考えていた。

不思議なことに、電車が道路を走っている。これは初めて私が見る乗り物で、広電と呼ばれている路面電車だった。乗ってみたら、少し揺れるけど面白かった。馬鹿みたいに妹と騒いではしゃいでいた私。この乗り物に乗っていた人々が原爆で飛ばされて、電車ごと亡くなったことなど思いもしなかった。もっと驚いたことは、この道路の下には、まだたくさんの遺骨や遺品が残っているということだ。

広電が、原爆ドーム前に着いた。ドームの入り口を見たときは、あまりよく分からない建物だと思った。おまけに記念写真を撮る時に、ピースサインをした私を、母と祖母は、あきれて見ていた。

しかし、そこまでだった。

原爆資料館に入ったら、部屋の中の異様な緊張感に包まれた。あまりのひどさに驚いた。平和できれいな街であった広島が、一発の爆弾で丸焦げになってしまったシミュレーションを見て、びっくりして何回も繰り返し見た。そこには、さっきまで呑気に笑っていた私ではない。こんなに美しい街を、何で壊すのか分からない気持ちで見ている私が立っていた。

順に進み、まだまだひどい物を見なくてはならなかった。一番私が印象に残ったのは、食べる物が不足して13歳から14歳の子どもの焼けた服だった。でも小学校4年生から5年生のサイズしかないのはどうしてだろうと疑問に感じていたら、係の人が説明してくれた。

「栄養状態がひどく悪かったのでしょうね。20歳の娘さんの服のサイズもか

なり小さいですよ。」

何も言えなかった。私は、わがままだ。大切な食べ物を嫌いだとか気分が乗らないとかで平気で食べなかったりするからだ。この時代にもし生まれていたら、どうだったのだろう。嫌だ、嫌だとばかり言って、みんなから相手にされなかっただろうし、最悪生きていられなかったかもしれない。こんなおいしい物がたくさんある時代に生まれた幸せを心の中から感じた。

原爆資料館で見たものからショックを受けたものは、これだけではない。やけどで顔がめちゃめちゃに焼かれてしまったお母さんが苦しんで苦しんで2日後の8月8日に亡くなってしまった写真と記事だ。母とよくケンカをするけれど、私の側にいつもいてくれる。それがうれしい。何でもないことが一番の幸せだということ。これが痛いほど分かった。

あの怖い戦争の時代を知らなかった私。わがままを言える今の時代は、とてもとても幸せだということが分かった。

ずっとこの平和が続きますように……。

美しい日本のために

第三中学校　　２年　　那　波　侑　奈

先日、父が広島に出張し、その帰りに広島在住の方々に強くすすめられ、原爆資料館を見学してきた。資料館では、たくさんの悲惨な資料があったそうだ。中には、私と同じ中学生の遺品などもあったと聞き、私は暗い気持ちになった。戦争の惨状を示す資料や被爆者の遺品に囲まれた、あまり楽しいとは言えない資料館を、現地の方々は、なぜすすめるのだろうか。

今年も広島と長崎の原爆の日が来た。ニュースで、記念式典の様子が映し出された。私はかげろうが立つほど暑そうな平和記念公園の様子を見て、毎年、出席者の方々も大変だなと思った。よく見ると、高齢の方がとても多い。それだけ、戦争から、そして原爆投下から年月が経っているんだなと感じた。テレビに映し出された人々の中には、私と同じ中学生の姿もあった。祖父母や曾祖父母が犠牲者となり、遺族となった子たちだと分かった。話を聞いていると、平和について真剣に語っている。自分が生まれるずっと前のできごとなのに、家族が戦争に殺される経験を持つと、こんなに真剣に平和について考えられるのだろうか。悲しいことだと思った。

広島の子たちは、小さい頃から原爆の象徴である原爆ドームが見える場所で生活し、学校などでも原爆や戦争についての教育を受けているそうだ。戦争のつめあとが身近にあり、戦争について考える機会を持っている。それに比べて、私はどうだろうか。美しい富士山の見える土地でのどかに育ち、こわい話はいや、と、あまり戦争に関する映画や本は見ないようにしていた。沼津だって同じ日本のはずなのに……。

沼津には戦争の被害がなかったのか、母に聞いた。母は、祖母から戦争の話をたくさん聞いたそうだ。沼津空襲という大きな空襲があり、千本に住んでいた祖母は、空襲時、家族で千本松原に逃げ込んだが、しょうい弾にぴかっと照らされ、家族ばらばらになって木々のかげにかくれながら走って逃げ続けたそうだ。防空ごうに逃げ込むまでの十数分間、子どもだったのにずっとねらわれ続けたらしい。アメリカ軍の飛行機のパイロットの顔がはっきり見え、忘れられない、と話したそうだ。沼津空襲の後、防空ごうから出ると、千本浜から沼津駅の向こう側まで建物は残っておらず、とても良く見渡せたらしい。普段、そんな素ぶりを見せない祖母が、子どもの頃そんなおそろしい体験をしていたとは、心の底から驚いた。母に、

「五年くらい前までは、退女教という団体の一員として、あちこちの小学校へ戦争体験を話しに行ってたんだって。侑奈はばあばに話を聞かなかったの？」

と言われてしまった。もっと祖母の話をちゃんと聞いておけばよかった。今はもう、記憶が壊れ、話してもらえなくなったのが残念だった。

先日テレビで、沖縄の戦争語り部さんが、

「人前で話すのは今年で最後にする。」

と言っているインタビューを見た。その方も、順を追ってわかりやすく話すことに自信がなくなったからだという。私たちが、戦争を体験した人の生の声を聞けるのは、もう、わずかな時間しかないことに、ようやく気付いた自分がいた。今まで顔をそむけてできる限りさけてきた自分が恥ずかしい。もうすぐ終戦の日がやってくる。テレビでは、戦争関連のニュースやアニメが放映される。今年こそ、目を背けずに、しっかり見て、戦争に関してもっと理解を深めたい。

私は、祖母のように戦争を経験したくない。美しい景色をながめ、幸せな一生を送りたい。この美しい日本を作る為、努力し、犠牲になった人たちのことをもっと知ることが私たちの義務と感じた。

これからの為に

第三中学校　　３年　　松　本　彩　里

曾祖母は、疎開するために岐阜から静岡県の伊東を走る汽車に乗っていました。曾祖母が座っていた所は、外の景色がよく見える窓側の席でした。景色を見ていると、途中から乗り込んできたと思われる女の人がこちらに歩いてきました。曾祖母は、その女の人に、

「窓側の方が景色がいいですよ。この席どうぞ。」

と言って、自分の座っていた席を女の人にゆずってあげました。すると、女の人は笑顔で

「ありがとうございます。」
と言ってその席に座りました。しばらく汽車に揺られていると、それは急に起こったのです。外からとてつもないくらいの爆発音が聞こえてきたと思ったら、その爆弾による爆風が汽車を襲ったのでした。幸いなことに、曾祖母は怪我をしたものの、命に別状はありませんでした。しかし、汽車の窓側に座っていた人たちはかなり重い怪我をしてしまっていました。中には、亡くなってしまった人もいました。席をゆずってあげた女の人もそのうちの一人でした。

私はこの話を曾祖母から聞きました。曾祖母が席をゆずっていなかったとしたら、この話を聞くことはなかったと思います。

戦争は、本当にあってはいけないことだと思います。世の中に争い事がない限り、戦争をしたい！と思う人はいないでしょう。きっと、世界中の人々は平和に暮らせることを望んでいると思います。日本は、今、戦争をすることなどありませんが、海外では今も戦争をしている国があります。その戦いはいつ終わるのか、本当に終わる時が来るのだろうか、と思ってしまいます。

私の曾祖母は、4年前に亡くなってしまいました。戦争を経験した人は、ほとんどの人が高齢者であとどのくらい生きられるか分からないくらいの歳になっています。だからこそ私たちが戦争を理解して、私たちがつくせる限り、次の世代の人たちに伝えていきたいと思います。

「平和」とは、戦争がないだけではないと思います。殺人やゆうかいなどの犯罪がない世界も含まれると思います。

最近、死体いき事件などの殺人事件がとても多くなっているように感じます。「イライラしたから刺した」や、「殺してみたかった」といったように、話せば解決する問題なのに、そのようなことを一切考えずに人を殺すといったとても悪質なことをする人がいると思うと、油断できない世の中なんだなと思えます。

一人一人が自分の思っていることを無理にかかえこまないで、相手と相談することも大切だと思います。この状況は、戦争がないから安心できるとは言いきれません。常に、恐怖が待っていることを忘れずに、日々に感謝して生きていきたいです。

これからの平和のために

第四中学校　　3年　　土　屋　美　遼

小学生の頃、「戦争」について、ただ恐ろしく、悲しいというイメージを持っていた。第二次世界大戦中、祖父が空襲で家を焼かれて逃げた話、もう一人の祖父も、授業がなくなり軍需工場で働かされた、という話を聞いた。けれども当時の自分にとっては、それはあくまで〝昔〟のできごと、違う世

界のことだった。そして中学生になり、パキスタンのマララさんの本や広島の被爆者についての本を読む機会があった。また、夏休みに広島で平和記念公園と、原爆資料館を訪れた。悲惨な、人間性を無視された犠牲者の写真を前に言葉を失った。戦争の犠牲になるのは、前線に出ていく兵士だけではない。ごく普通の生活を送る人たち、子どもたちの笑い声も、原爆投下の一瞬で消え去っていったのだ。

中学3年生となった今年は、歴史の授業で世界大戦について学び、国語の授業では「黒い雨」を読んだ。合唱コンクールでは、戦争で亡くなった妹を想う「木琴」という曲を選んだ。そこで担任の先生が、もっと戦争について考えようと皆に見せたドラマが「さとうきび畑の唄」だ。森山良子さんが歌う「さとうきび畑」をもとに作られ放送されたもので、沖縄で幸せに暮らしていた一家がアメリカとの戦に巻きこまれていく悲しい話だった。

息子たちも、ついには父親までも兵隊にとられ、死んでいった。明るく心優しい父は、自分が殺されることになっても、けがをしたアメリカ兵を見捨てられないような人物。国籍など関係なく、同じ地球に生まれてきた人間は皆平等であると信じていた。これがまともな考えだと思う。また、銃をむけられた少女が唯一教わった英語「Do you kill me？」と言うと、アメリカ兵は静かに銃を下げ、その子の頭をなでるというシーンもあった。しかし、極限状況にある人間は、自分を見失ってしまうのだろう。沖縄戦では、自分たちがみつかるからと一般人を壕(ごう)から追い出したり、終戦時には自決させたりした日本兵もいたという。悪いのは、個人ではなく、戦争という状況なのだと思った。ドラマを観終わった時、クラスの友達は皆泣いていた。ドラマでは戦争中は母のお腹にいて、父の顔を知らずに育った少女の言葉が「さとうきび畑の唄」だ。歌詞を改めて見ると、涙がとまらない。「ざわわ ざわわ ざわわ」を繰り返す。ゆったりと美しい歌と思っていたが、会ったことのない父を想う切ない歌だった。歌詞を知らない人はぜひ11番まである歌詞を最後まで読んでみてほしい。その中に「むかし海の向こうからいくさがやってきて」とある。沖縄の人々は突然戦争に巻きこまれ、犠牲となったのだ。広島や長崎の人たちもそうだ。戦争をしようなんて思ってもいなかったのに。

21世紀も平和の世紀にはならなかった。世界のいろいろなところで争いの種はなくならず、テロや内戦で多くの弱い立場の人、子どもの命が失われている。異常気象という最優先で考えるべき問題があるというのに、足並みはそろわず、軍縮も進まない。当たり前だが、だれもが自分が、自分の国が戦争の犠牲になることなど望んではいない。宗教のしがらみ、過去の確執もあることから、争いの種を取りのぞくことは難しいのだろう。しかし、宗教の問題が少なく、唯一の被爆国である日本こそ、今以上に平和の大切さを訴え、世界の軍縮について声をあげていくべきではないか。

では、私たち中学生には何ができるのだろうか。まずは、知ることだろう。過去の戦争の原因、起こってしまった現実、それに現在の事情を知らなくては、声をあげていくことも、伝えていくこともできないから。

8月が来たら思い出すのではなく、これからは、もっと世界のニュースに敏感になり、ことあるごとにいろいろな人の話をしっかりしていこうと思う。

戦争・原爆を通して

第四中学校　　３年　　西　山　綺　花

1学期中に国語の授業で「黒い雨」、社会の授業で戦争や原爆について学んだ私は、戦争について興味がわいたので、その後、何度か市立図書館に行って、いくつか資料を読んできました。それをもとにして、私の戦争、原爆に対しての思いや考えを書きます。

まず、戦争についてです。今の私たちにとって戦争は、してはいけないこと、ですが、その時代の人たちにとっては「戦争はやらなくてはならないこと」だったのだと思います。望んでもいないのに戦地に連れていかれ、国のために死ぬ。それが当たり前の時代だったのだと、本を読んで改めて気づきました。ある本には、戦争を途中で止めなかったのは、天皇に恥をかかせたくなかったからだ、と書いてありました。降伏することは、その国で一番偉い人に恥をかかせることだ、という考えがあったそうです。おかしいと思いませんか。もちろん、これが本当のことだったかは分かりません。しかし、もし本当だったらこんな考え方は間違っています。なぜなら、最終的には、天皇に恥をかかせないために何百万人もの命を犠牲にした上に、更に多くの犠牲者を出してしまった出来事のきっかけとなってしまったのですから。

1945年8月6日には広島に、9日には長崎に、アメリカ軍によって原爆が投下されました。その時の様子について、たくさんの写真を授業で見ましたが、どれも残酷なものばかりでした。その中で私が特に印象に残った写真を何枚か紹介したいと思います。

まず1枚目です。この写真は、爆発時の閃光によって、コンクリートに影が焼き付いている様子が映されていました。近くにあったこの写真の説明文を読んでみると、閃光によって人が消える、という信じがたいことが書かれていました。消えてしまった人の影がコンクリートの壁や地面に焼きついていると知り、ぞっとしました。なぜなら、どの影が一体誰だったのか、全く分からないからです。更に言うと、もし消えてしまった人の家族が全員亡くなっているならば、誰もその人のことを知らない。つまり、存在していなかったのも同然になってしまうのです。正直、本当にこんなことがあったのかと、信じられない気持ちでいっぱいです。

2枚目は、女の人が2、3人立っている写真でした。どこか変なところでもあるのかとよくよく見てみると、その女の人たちの足下には、皮膚が黒く焼けこげた老人が横たわっていました。びっくりして傍に立っている女の人たちの表情を見ると、特に驚いた様子もなく、平然としていました。ありえな

い、それが私の感想でした。傍に死体があるのに、どうしてこんなに平然としていられるのだろう。そう思っていましたが、街の一角に死体が積み上げられている写真、街中にがれきと共に死体が散乱している写真を見て、この人たちは死体を見慣れてしまっている、と気づきました。ある人は家族を失くし、ある人は友を失くし、またある人は愛する人を失くしました。それだけでも辛いはずなのに、目の前にその人たちの死体が散乱しているとなると、この女の人たちも含め、生き残っている人たちは本当に辛かったと思います。そのような人たちの気持ちを考えながら写真を見かえすと、胸が苦しかったです。

この経験を通して、今、こうして不自由なく暮らせていることがすごく幸せなことなのだと、改めて実感しました。これからもこんな平和な毎日がずっと続くことを祈って、精一杯生きていきたいと思います。

戦争と食事

片浜中学校　　１年　　井　出　柊　弥

「原子爆弾」

物も、人の命も一瞬にしてすべてを焼き尽くしてしまう恐ろしい核兵器だということを知った。

今の日本は平和だと思う。僕の身近には戦争を経験した人はもういない。普段の生活で戦争を意識することはない。しかし、原爆ドームや、平和記念公園では、その恐ろしさを感じられる。

昨年の冬、ボーイスカウトの活動で広島の平和記念公園に行った。千羽鶴を奉納するためだ。そこで初めて原子爆弾の実物大の模型を見た。キノコ雲の写真、溶けたランドセル、8時15分で止まった時計、性別が分からない死体、全身やけどの写真。胸が苦しくなった。痛かっただろうな。苦しかっただろうな。このランドセルの持ち主はどうなったのか。8時15分で広島の「時」が止まったんだ。改めて戦争の恐ろしさを感じた。

僕の住む沼津市には、戦争の跡がある。御成橋に残る爆弾の跡だ。もし今、沼津に原爆が落ちてきたら……。友達や家族を亡くしてしまったら……。僕は生きる勇気をなくしてしまうだろう。「もし」でも考えたくない。

戦争の話が聞きたくて、戦後4?5年たって生まれた祖父母に戦後の話を聞かせてもらった。その中でも印象に残ったのが、歯ブラシと食事についてだ。

当時の歯ブラシは、竹の棒に豚の毛を付けたもので、それに歯磨き粉を付けて磨いていたそうだ。竹の棒は固いから歯ぐきに当たったら痛そうだ。それに豚の毛は衛生的に悪そうだ。粉の歯磨き粉も口の中がパサパサしそうで磨きにくそうだと思った。

食事はというと、自分たちで育てた野菜で漬物を作り、にぼし、梅干し、ぬかみそなどの保存食が主なおかずだった。主食は麦飯。肉や魚が好きな僕は、こんな食事はうれしくない。しかし、「生きるため」に食べていた当時の人たちのことを考えたら、そんなことは言っていられないだろう。
「戦後の食事といえば、すいとんだね。」
と、祖母がすいとんを作ってくれた。すいとんには、人参が入っているが、皮をむかずにそのまま使う。捨てるのがもったいないからだ。肉はめったに入らないが、鶏を飼えるようなお金持ちの人だけが食べられたそうだ。

初めて食べたすいとんは豚汁のようだった。小麦粉を水で練って作った団子は、真ん丸ではなくごつごつした岩のような形で、柔らかいところと固いところがあって、味もしないから食べにくかった。

このような食事が毎日だと思うと、現在の食事が豊かなのは言うまでもない。好き嫌いをしたら、当時の人に怒られてしまうだろう。おいしく食事ができる「あたりまえ」に感謝しなければならないと思った。

広島でのボーイスカウト活動をきっかけに、戦争について関心を持つことができた。聞いたり、調べたりしていくうちに、少しだけだが、戦争について知識が増えた。そして、戦争を経験していない僕たちにできることは何かを考えるようになった。今後、どのようにして後世へ伝えていけばいいのだろうか。戦争を経験していない僕たちが、知っている言葉を並べることに意味があるのか。そう思ったときに、まずは僕自身が「あたりまえ」のことに感謝していこうと思った。終戦記念日や、原爆ドーム、平和記念公園は、忘れかけていた「感謝の気持ち」を思い出させてくれる場所なのかもしれない。一人ひとりが、「あたりまえ」のことに感謝する気持ちを持ち続ければ、「平和」な世界が訪れるのだと思う。

戦争中の女性や子どもの暮らしを見て

片浜中学校　　３年　　後　藤　美央理

私は、夏休みにテレビで戦後73年という番組を見て、自分は戦争のことを全然知らないことが分かりました。そこで、私は8月18日、東京の戦中・戦後の暮らしを知ることができる昭和館と戦傷病者史料館であるしょうけい館に行ってみることにしました。

昭和館では、あまり教科書に載っていないようなことをたくさん知ることができ、すごくいい勉強になりました。その中でも戦中の子どもや女性の生活の展示はとても興味深いものでした。例えば、千人針です。これは大きな布に千人の女性が一針ずつ糸で玉を結び、出征する男性に「鉄砲の弾が当たらないように」「無事に帰って来られるように」という女性たちの願いを込めたものです。他にも、人々を疎開させるだけでなく建物を壊し、道を広くして

逃げやすくする建物疎開や、空襲時の死傷者や避難者の身元を明らかにするため各自は予め身元票を所持する必要があったことなど沢山学べました。私が、昭和館を見 学し、最も心に残ったことは、昭和館にあった体感コーナーでの防空壕(ごう)体験で、実際に爆弾の落とされる音が本当に聞こえすごく怖くて、よく子どもがこの時代に生きていたと思いました。そしてこの時代の子どもたちはこの恐怖の中生きていたことに本当にすごいと思いました。私だったら本当に怖くて死にたいと思うと思いました。

しょうけい館では、兵士が負った傷やその傷を治す病院のジオラマ、義足や義手などがあり、現実の状況が少し伝わってきました。病院の様子がジオラマですごくリアルに表現されており、病院の人たちも兵士もすごく大変だったことが伝わってきました。また、戦争を体験した人が当時身に付けていた物により命が助かった、という実物の展示がありました。眼鏡がなかったら銃弾が頭の奥まで行ってしまい助からなかった、胸ポケットにタバコケースを入れていなかったら死んでいた、などの穴の開いた実物があり、奇跡を目の当たりにしました。私は、これまでの戦争の話で、兵士の傷のことなどは考えてもいなくてしょうけい館に行き、戦争が苦しいのは戦時中だけでなく、戦争が終わってしまってもずっと苦しんでいる人が沢山いて、苦しみが続くことを知りました。

私は今回の資料館を見てやはり戦争は2度と起こしてはいけないと改めて思いました。戦争は誰も得しないし、争っていても何も生まれなくて本当にいいことは何もないと思います。しかし、戦争を世界が行ったという事実は絶対に消えることはないから、私たちが戦争というものにしっかりと向き合い、戦争を体験している人が減ってきているからこそ戦争という怖さ、原爆という怖さを後に産まれてくる人たちにつなげていかないといけないと思います。そして、戦争をしている時代に産まれず、今の平和な時代、平和な場所に産まれたことに感謝をして、毎日元気に生きなければいけないと思いました。今回のように戦争に関する資料館に行けることもあまりないと思うので、この体験や見学を日々頭に入れ、毎日毎日を大切にし、一生懸命生きたいと思います。そして、今回は女性や子どもの戦時中の暮らしを知ることができましたが、次は兵士が戦場でどのように働いていたのか、どのように戦っていたのかや、その時代の高齢者はどのように暮らしていたのかも知りたくなりました。次に行くならば、原爆が投下された広島や長崎に行き、原爆ドームなども見てみたいなと思いました。

つなぐ

金岡中学校　　2年　　日　吉　麻　友

見上げると
相手国のプロペラ機と
雨のように降ってくる焼夷(い)弾

見渡してみれば
火の海のような街と
たくさんの身元不明の人たち

どれだけ怖いのだろう
どれだけ悲しいのだろう
私にはわからない
でも
73年前の出来事を知ること
次の世代へ伝えることはできる

見上げると
青い空に
国と国をつなぐ飛行機

見渡してみれば
人でにぎわう街に
行き交うたくさんの車たち

終戦から73年
今では平和が当たり前の毎日

焼け野原から再スタート
戦争よりも
ずっとずっと長い
平和の時間を築きあげてきた
人々の努力があるから

平和の時間を
終わらせてしまわないように
人々の努力を
ムダにしてしまわないように
戦争を知る
この街を知る

平和のタスキをつないでいこう

修学旅行と祖母の話

静浦小中一貫学校　　９年　　伊　海　咲　子

私の祖父と祖母は戦争体験者だ。私が小学生の時の夏休み、祖母が私に戦争の話をしてくれたことがある。その時の私は、戦争は良くないということは分かっていた。でも深く考えずに、自分とは関係のない過去の出来事という考え方をしていた。

9年生になって、修学旅行で沖縄へ行くことになった。事前学習で沖縄の歴史や文化をたくさん学んだ。小学生の頃とは違って、戦争がどれだけ苦しい大変な出来事だったのかよく考えるようになった。

そして、修学旅行では戦争に関わる場所にたくさん行った。その中で心に残っているのは、ひめゆり平和祈念資料館とアブチラガマだ。事前学習でひめゆり学徒隊は自分と同じ歳くらいの人たちが兵隊さんのお世話や、手術の手伝いをしていたということは知っていた。実際に行ってみると、テレビで見たことのあるひめゆりの塔があった。私たちはそこでガイドさんの話を聞いた。楽しく暮らしていた生活がだんだんと変わり、戦争のための授業に変わっていったという話を聞き、教育のおそろしさを感じた。ひめゆり平和祈念資料館の中では生徒たちの集合写真や顔写真がたくさんあった。私は展示してあるそれらを見て、言葉にできない何かを感じた。自分と何も変わらない、ただこの時代に生まれてきただけで、ひめゆり学徒隊の人たちは苦しい日々を過ごして命を失っていった。ひめゆり学徒隊の人たちに限らず、たくさんの人たちが平和を願っていたと思う。今では当たり前のことがその当時の人たちの叶えたい願いで、私たちのように毎日学校へ通えること、お腹いっぱいにご飯が食べられること、家族と一緒に過ごせることは当たり前ではなかったのだ。今の生活のありがたさを心から感じた。

そして、私たちはアブチラガマという所へも行った。アブチラガマは、全長270メートルの自然洞窟で、ガマは避難場所や倉庫や病院として当時使われた。ガマの入口は少し狭く、下へと向かう急な階段を手すりにつかまりながら進んだ。降りていくにつれて、空気が冷たくなるのを感じた。ガイドさんの話を聞きながら進んでいくと、そこには遺物や石積や多くの命を支えた貴重な井戸があった。全員でライトを一斉に消した。すると今までに感じたことのないくらいの暗さと静かで重い空気の中に、水がポタポタと落ちる音が聞こえた。この暗さの中生活するのは大変だろうと思っていた。でも、ガイドさんが「暗かったから良かった。このガマの中の状況が暗くて見えづらくて良かった。」と言っていた。生存者の話をしてくれた。私はその話を聞いて、今では考えられない状況がそこにはあって、戦争は本当に恐ろしいものだと改めて感じた。

その他にも、私たちは伊江島や平和祈念公園へ行った。沖縄修学旅行で私は今の生活が豊かで幸せなことにもっと感謝していかなければいけないと感

じた。この日本にあった戦争を忘れてはいけない。そして伝えていくことの大切さも知ることができた。だからこそ、私は夏休みに祖母が話してくれた戦争の話や想いをもう1度聞きたいと思った。そしてもう1度、深く考えてみたいと思った。

普通のこと

静浦小中一貫学校　　９年　　杉　浦　瀬　那

人が嫌がることをしない。人の悲しむことをしない。人に優しくする。みな普通のことである。例外はあるが、一般的には普通のことである。これらを破ると、何らかの戒めを受ける、というのも普通である。

私は修学旅行で沖縄へ行った。主な目的は戦争のことを学ぶことだ。沖縄戦についての事前学習は時間をかけてやってきた。私は、沖縄の戦争がどんなものだったかを理解したつもりでいた。しかし、実際は理解など出来ていなかった。事前学習で学んだのは、あくまで歴史に過ぎなかったのである。

私は沖縄で、数々の戦跡を歩いた。中には、当時とほぼ変わらない状態で遺されているものもあった。見ていくうちに、私は事前学習では、感じられなかったものを見つけた。それは、アブチラガマという、暗い洞窟でのことだった。アブチラガマには、当時多くの人が避難していた。野戦病院としても使われ、負傷兵もたくさん運びこまれた。そして、中で最期を迎えた人もたくさんいた。ここに入っていった時、私は不安と恐怖を感じた。入る前は、そう思っていなかったのに。当たり前だ。事前学習で見てきたのは、写真などの、第三者から見た様子に過ぎなかったのだ。中で実際に過ごした人や、最期を迎えた人の気持ちなど、写真を見ただけで分かるはずないのだ。自分の目で見て、そこに立った時、初めて「気持ちがわかる」と言えるのである。もし私がこの時代にいたら、この暗い場所で、過ごせただろうか。苦しさにもだえながら亡くなっていく人を、見て耐えられただろうか。これは作り話ではない。ほんの少し前に、実際にあった出来事なのである。

私は、戦争という過去を見て、思ったことがある。この人たちの「普通」とは、一体なんだったのだろうか、と。様子を見る限り、今の「普通」と、昔の「普通」が違ったのは明確なことだ。当然である。時代は変わっていくものだ。江戸時代と明治時代の普通は違うし、今と江戸時代でも違う。だが、普通というものにも、定義はある。誰が見てもこれはおかしい、と言えるものは「普通」とは言えないだろう。

では、死体遺棄を子供にさせたり、「捕まるくらいなら」と子供にまで自殺を強要したりすることが、普通だと言えるだろうか。人を人として扱わないことが、普通だと、本当に言えるのだろうか。少なくとも、私は言えない。この世に生まれてきた、人間として。

私は、この時代の普通が、普通ではないことを知った。いや、この 時代の人からすれば、普通だったのかもしれない。もし本当にそうな らば、私はこう言いたい。狂っている、と。

普通とはとても言い難いことを、普通のこととして、昔の日本はやっていたのである。もちろんおかしいと思った人もいただろう。だが、狂った多勢の中で、少数がおかしいと言ったところで、その人たちが狂っている、と言われてしまうのだ。そして知らぬ間に、全員が狂ってしまうのだ。おそろしい集団心理である。おかしい、というその正常な気づきは、逆らったら何をされるかわからないという、恐怖によって、自らなかったことにしてしまうのである。こうして、まるで洗脳されたかの如く、人々は間違った道へ進み、命を落としていったのである。

そして、終戦して人々は気づいた。今までの日本は、自分たちは、狂っていたんだと。

普通とは何なのか。人によって答えは違うだろう。だが、過去を振り返った今だからこそ、これははっきりと言える。おかしいことに対して、おかしいと言えることこそが、本当の「普通」と言えるのだ。

「普通」ではないことが、「普通」になってしまう戦争。決して風化させてはいけないと強く感じた。

あたり前のありがたさ

静浦小中一貫学校　　９年　　野　村　美　月

私の学校では、修学旅行は京都ではなく、沖縄だ。私はずっと京都に行ってみたかった。修学旅行が沖縄と聞いた時、正直私は残念だと思った。京都の方が多くの歴史を感じることができると思っていたからだ。しかし、沖縄に向けて事前学習をしていくうちに沖縄には深く悲しい歴史があることを知った。

実際に沖縄に行ってみると事前学習をした時よりも戦争の悲惨さを感じた。それは、想像していたものより戦争による影響がはるかに大きかったからだろう。一番最初に感じたのは摩文二（まぶに）の丘に行ってだ。ここには沖縄戦で亡くなった全国の人の慰霊碑があった。中でもやはり沖縄の慰霊碑は特別で長男や次女によって名前が違っていた。これは生後間もなくして名前をつけられずに亡くなった子供たちだった。慰霊碑に刻まれていたその名前には平和を願う親による愛の形だった。それを聞いた時、私は戦争の怖さを感じた。

そんなことを感じながら次に行ったのはアブチラガマだった。私たちには懐中電灯があったけれどそれがあっても、中は充分暗かった。当時は、懐中

電灯もなく真っ暗な中でひめゆり学徒隊は兵士のお世話をしていた。それを聞いた時、当時に戻って代わってあげたいと思った。1日1日、敵におびえ負傷兵のお世話をしてとてつもなく長くてつらい日々だったと思う。解散命令が出された後、ひめゆり学徒隊はどこのガマにも受け入れてもらえず集団自決をした人たちがほとんどだったという。生き残ったのはわずか3人だったと。その3人が建てたひめゆり平和祈念資料館では、終戦後外に出て太陽の光を浴びた時の喜びと自由への喜びがあったと書いてあった。私たちは今、あたり前のように日の光をあびて普通に生活をしている。しかし当時の人にとってはあたり前ではなく生きることさえも許されなかった。悲しくてつらかったと思う。今ではにぎやかでフレンドリーな人が多い沖縄。しかし、その歴史にはつらくて悲しい過去があった。

私の民泊した家の方によると、まず米軍は伊江島に上陸したそうだ。当時伊江島には、約3000人から4000人の人が住んでいたが戦争で兵士を含め約5000人の人が亡くなったそうだ。さらに伊江島の35パーセントが米軍基地だ。今でも、その不発弾やオスプレイの飛行訓練場がある。

また、沖縄には沖縄独自のお金や文化があったが戦争によってその文化までもが奪われてしまい、今ではアメリカ文化に染まっていた。

民泊先の方が言っていた。

「戦争で被害が大きかったのは兵士ではなく国民。戦争は、国民を巻き込むだけで何の利益にもならない。また、戦争はしだいに人を洗脳していき、人を人でないものにしてしまう。戦争は2度と起こしてはならない。」

と。私はそれを聞いて戦争は絶対に忘れてはならない歴史だと思った。

今回の修学旅行を通して、ふり返ってみると自分たちの恵まれた環境がありがたいと思った。普通に生活していることが戦争中は普通ではなかった。それを考えると、自分が仲間たちと過ごしている日々がかけがえのない、大切な日々だと思った。今の日本があるのは、戦争中につらい思いをしながら様々なことと戦っていた人々のおかげだった。その人たちは、生きることが許されなかった。だから私たちは命を大切にし、生きたくても生きることができなかった人たちの分も生きていくべきだと思う。戦争を起こさないためには、平和にするためには、人と人が思いやり、助け合うことが大切なのではないだろうか。

「経験」から

静浦小中一貫学校　　９年　　古　屋　海　凪

辺りは真っ暗で、狭く、深い洞くつの中。私達は、このような環境の中、何日間も、怯えふるえながら生きていけるだろうか。蛇口をひねれば水が出る。スイッチを押せば電気がつく。簡単に火を出せる。今となっては当然で

あるこれらのこと。突然、使えなくなったとしたら、生きていけるのだろうか。

こんなことを考えたのは、修学旅行がきっかけである。京都に行く中学校が大半の中、私達は「沖縄」へ行くことになった。初めてこの話を聞いた時、正直（京都が良かったな）と思った。しかし、それもそのはずだ。まだ小学生の頃で、「沖縄」と「戦争」の関連、そもそも「戦争」について何も知識が無かったからだ。学年が上がるにつれ、沖縄学習が始まった。京都を望んでいた当時の自分と、考えが180度変わるのに、そう時間はかからなかった。過去にあった、戦争というものの怖さ。たった70年前まで、自分が今住んでいる「日本」で行われたという事実。さらには、沖縄で地上戦が行われたという衝撃。その時から、沖縄で実際に起きた出来事について、知りたい、という気持ちが高まっていった。事前学習で、多くの情報を得て、沖縄に出発した。そこで実際に体験したことは永遠に忘れてはいけない、と強く心に誓った。

最初に向かったのは、「ひめゆり平和祈念資料館」。地上戦の時、13?19歳までの、ひめゆり学徒隊と呼ばれる女学生が、兵隊の手伝いをさせられたのだ。戦争がエスカレートしていくにつれて、ひめゆり女学生達の労働も、だんだんと重いものになっていった。時には、兵隊の手術で、痛みで暴れないようにおさえさせられたり。時には、切り離した手や足を捨てさせられたり。このようなことが実際にあったという衝撃。更に、自分と同じような年齢の人達が今のことをやっていたということ。そこには、実際に、ひめゆり女学生達が労働をしていた洞窟を再現したところがあった。数々の労働を暗く、深い洞くつでしていた、と考えるだけでも、胸がはち切れそうな思いになる。〝戦争の怖さ〟を一番最初に〝体感〟した場所だった。

次に行ったところは、アブチラガマだ。アブチラガマというのは、沖縄の方言で、深く縦に長い洞くつという意味である。この洞くつは、名前の通り、とても深い。更に、地中とは思えないほどの広さだった。ここは最初「糸数」という地域の避難所として使われていたが、戦争が進むにつれて、やがて陸軍病院の分室となったところである。中に入る。驚くことに、声が出ない。何故かは分からないが、全く声が出なかった。それほどの雰囲気、空気の重さというのがそこにはあった。アブチラガマが病院として使われていた時、当時の技術では助けることが出来なかった重症患者は、別室に移され放置された、と聞いた。国のために、一生懸命戦っていたというのに、病気にかかってしまったせいで、戦場復帰すら許してもらえず「邪魔者」のような扱いをされてしまうのだ。「戦争の怖さ」とは、計り知ることができない、言葉で表すこともできない、奥底にひそみ続ける巨大ななにかだと思う。

「戦争」は、沖縄や、授業などで学んだことだけが当然、全てではない。世界中の話だ。広島、長崎に落とされ、何十万人もの命をうばった原子爆弾。その何十倍かの威力を持った〝核兵器〟を、未だに、保持している国はいく

つかある。〝核兵器〟とは、本当に必要なものなのだろうか。それによってまた、戦争が引き起こされることはないだろうか。唯一の被爆国である我々〝日本〟は、世界を代表して、〝核兵器の放棄〟を訴え続けるべきだ。それと同時に、今ある「幸せ」をかみしめ、それが「過去」とならないように、生活していきたいと、私は思う。

悲劇は二度と起こさせない

愛鷹中学校　　２年　　宍　戸　光　輝

去年の8月6日、僕は友達と一緒に遊びに出かけていました。自転車で走っている途中、サイレンが鳴り始め、みんなが驚いていて、僕はふと、その日が8月6日だということに気づきました。何気なくその時は流してしまいましたが、家に帰ってから原爆投下の話や、戦争が如何に凄惨かつ無益だったかを改めて調べてみました。日本は自分たちのように苦しむ人たちを2度と原爆や核兵器でつくらないよう、広島を中心に、8月になると、平和記念式典が行われ、戦争の悲劇を後世に伝えようと活動しているとその日のニュースでも 言っていました。

2年生の道徳の時間に、原爆について考える授業がありました。クラスのみんなが先生からの質問を自分なりの考えで答えていく中で、僕はなかなかペンが進みませんでした。その授業中、僕はずっと原爆が投下された瞬間、爆心地にいた人々は何を感じたのか、何を考えていたのだろうか、授業中、頭の中でその自問自答を繰り返していまし た。

その授業中ふと、僕は思いました。「なぜ日本だけが被害者のように振る舞っているのだろう。」と。確かに広島や長崎は原爆投下によって甚大な被害を受け、日本のあらゆる場所が空襲で被害を受けました。ですが、それはアメリカや他の国も同じであり、なぜ日本だけが注目されるのだろうと思いました。

国によって被害の度合いは違います。けれども戦争で多くの人が犠牲になったことに変わりはなく、世界のニュースを日本でも報道するようになった今の時代にこそ、原爆の恐ろしさと共に、世界中で数多くの命が犠牲になった戦争の恐ろしさを伝えるべきではないかと思いました。

今も世界中で国内の紛争、戦争などが絶えず、多くの民間人が犠牲になっています。生きていても戦いの中で苦しむ人々は後を絶たず、この地球上から争いが無くなることはまだまだ時間のかかることかもしれません。

それでもいつか地球上から戦争が無くなって、世界中の人々が何気ない日々を笑顔で過ごせるような、そんな世界になることを願っています。

原爆が落とされた第二次世界大戦は、日本だけでなく、世界中の国で大きな被害と、人々の心に大きな傷を与えたはずです。去年の8月6日を、友達と過

ごせたことはとても幸福なことであり、戦時中では考えられないような贅沢ができているのも、当たり前のように家に帰って家族でご飯が食べられるのも、全て、戦争後の凄惨な状況でもどれだけ心に傷を負っても強い心で日本を再建してくれた昔の人々のおかげだと思っています。

今の僕たちにできることなど、無いかもしれないけれど、もう2度と戦争なんかしてはいけない、どんな理由があろうとも、正当化されない無益な争いであると心に留め、もう2度と「8月6日」を悲劇の日にしないように、何があったのかを後世にまで語り継ぎ、もう戦争で悲しむ人がいない世の中にしていくのが平和な時代に生まれた僕たちの役目だと考え、感じました。

知ること、そして伝えること

愛鷹中学校　　２年　　八　木　桃　香

世界を平和にするために、どうしたら良いのか考えたことがありますか。多くの人は、

（戦争がなくなればいい……。）

と頭に浮かんだことでしょう。戦争がなくなることが、世界の平和になる第一歩だと思います。でも、戦争をするほど仲の悪い関係が生じることからも、相手を理解するということはとても難しいことだと思います。けれど、お互いに理解しなければ、また悲しく残こくである、あの戦争が起きてしまいます。

1945年の夏、太平洋戦争で広島と長崎に原子爆弾が落とされました。特に、被害が大きかったのは広島です。

〝リトルボーイ〟人類史上、初めて人間に対して落とされた核兵器です。原爆が落とされた時の温度は何千度にも達し、その後に放射線を含んだ黒い雨が降り注ぎました。放射線とは、人体の奥深くまで入りこみ、細胞を破壊し、深刻な障害を引き起こします。また、被爆直後ではなく、何年にもわたって症状が現れたりする恐ろしいものです。原爆が落とされたことによって、戦争とは関係のない大勢の人たちが巻き込まれてしまったことに対して、私は強い怒りを感じました。

私は小学生の時から、原爆について興味があったので、中学生になった最初の夏に、広島にある原爆ドームを訪れました。原爆ドームは、悲しみと平和の願いを象徴した建物として、大切に保存されています。また、平和記念資料館に展示されていた、原爆投下直後の写真からは、戦争の恐ろしさを感じることができました。あの不気味な形をしたキノコ雲の中で、一体何が起こっていたのかと思うと、とても怖くて想像することができません。いつ爆弾が落とされるのか分からない状況の中で人々は苦しみ、また恐怖と戦争への憎しみでいっぱいだったと思います。

さらに私は、今年の夏休みに清水町で「戦争展」が開催されることを知

り、会場を訪れました。会場には、広島と長崎の原爆の悲惨さを伝えるパネルや、町民から寄せられた財布やカバンなどの戦死者の遺品も展示されていました。たくさんの写真パネルを見ているうちに、心がとても痛みました。背中を大やけどし、一年九カ月苦しんだ男の子の写真、全身やけどを負って「水、水……」とうめきながら亡くなってしまった三歳の男の子の話、原爆を落とされ家族の顔も見られず話すこともできずに亡くなってしまった人々……。本当に想像を絶します。大切な人が次々に亡くなってしまうことを考えると「もう絶対に2度と同じ失敗を繰り返してはならない。」と私は強く感じました。そして、今戦争している国もすぐやめて、世界の人々が平和な暮らしをしてほしいと思いました。

平和を実現するために、今私たちに何ができるのでしょうか。私が考えたのは、戦争のおそろしさについて深く「知る」ことで、戦争にはメリットがないのを、周りの人たちに「伝える」必要があるということです。それが世界中に広がっていき、「この世から、戦争が無くなってほしい。」と、考える人も増えていくと思います。それを続けることによって、いつかはこの世界から戦争が無くなることが実現すると私は信じたいです。

私が思う平和とは、戦争がなく、国同士が助け合い、世界中の人々が幸せで思いやる優しい心を持つことだと思います。どこの国でも誰にでも幸せに、平和に暮らしていく権利があります。そして、再び戦争による深い悲しみや後悔などを誰にも感じてほしくないです。

過去の事実は変えられません。それを勇気を出して、伝えようとしている人がいたら、耳を傾けてみてはいかがですか。その事実を知り、それを次の世代に伝えていくことが、私たちにできる大切なことだと思います。

戦争からは何もうまれない

愛鷹中学校　　３年　　渡　邉　あすか

ある日、一つの詩に出会い、衝撃を受けました。それは私と同じ中学3年生の相良倫子さんが書いた「生きる」という詩です。戦争はよくないこと、平和はよいことと漠然と思うだけの今までの考え方がとてつもなく薄っぺらいものに感じるとともに、心に重い鉛の塊がずしんと落とされたようでした。戦争の恐ろしさ、悲惨さ、命の大切さは一言二言で表現できる簡単なものではないと考えさせられました。

私の祖母は戦争の経験しています。

「戦争中って大変だったの？」

と問うと、笑いながら

「怖いとは思わなかったし、あんまり覚えてないな。」

と当時のことを話すことはあまりありませんでした。小学生の頃は何も思い

ませんでしたが、中学生となった今、この詩を読むと、祖母は、本当は思い出したくなかったのではないかと心に鈍い痛みを覚えました。沖縄のように激しい地上戦はなかったものの、沼津も幾度となく爆撃を受けてきました。敵機の飛来を知らせるサイレンが鳴るたびに防空壕ごうに避難し、不気味なエンジン音や、爆弾が投下され、建物が破壊されていく爆音を間近で聞くことは、堪え難い恐怖であったと思います。

多くを語らない祖母のかわりに、姉が沼津における戦争について調べたことがありました。そこには、思っていた以上の惨状が書いてありました。昭和20年七月の沼津空襲では、真夜中から空襲が始まり、膨大な数の焼夷弾が沼津の街を焼きつくしました。香貫山は赤々と燃え、狩野川にかかる橋は焼け落ちました。美しかったであろう千本松原にも焼夷弾は容赦なく投下され、海岸には大きな穴がいくつもあいていました。300人近い人々の命が奪われ、住む家もなくしました。祖母はこの地獄のような火の海の中をわずかな荷物を背負って逃げていたのです。10歳の子供が平常心でいられるはずがありません。

「生きている時代が違うというだけで」無邪気に過ごせるはずの暮らしも学校も失い、本を読んで感動することも、勉強に励むことも友人との楽しい時間も全てが奪われてしまいました。逃げまどいながら焼きつくされていく日常をどんな気持ちで見ていたのでしょうか。もし自分が愛鷹山から同じ光景を見たとしたら……。想像することができません。

戦争という愚かな行為で、あらゆるものが簡単に葬られてしまう。「みんな生きていたのだ。私と何も変わらない。懸命に生きる命だったのだ。」まさにその通りだと思います。ありふれた日常、輝く未来、全てを破壊してしまう戦争など必要であるはずがありません。

姉がまとめたレポートの中に、衝撃的なことが書いてありました。

『祖母の住んでいた家のすぐ近くに爆弾が投下され、目の前で同級生が亡くなった。』

平和の詩をきっかけに、戦争の悲惨さを改めて考える夏になりました。戦争に関して多くを語ろうとしなかった祖母は、たくさんの本や資料を残していってくれました。つらく悲しく、封印してしまいたい時代ですが、決して忘れてほしくない時代なんだという無言のメッセージであると感じます。それらと共に、穏やかな毎日や変わらない沼津の街並みが私に平和の大切さを教えてくれています。

雨垂れ石を穿つ

原中学校　　１年　　藤　原　速　人

僕には八19歳の曾祖母がいる。六年生の時、その曾祖母にインタビューをして、「今と昔の12歳」というレポートにまとめたことがある。平和について真剣に考えたのは、その時が初めてだ。それまで「平和」について意識したことは1度もなく、テレビで戦争や事件のニュースを見ても、どうせどこか別の世界の話だ、僕とは何も関係のないこ とだと思っていた。

しかし、曾祖母の話を聞いて、僕の考えは180度変わった。戦争は日本で確かに起こっていた。テレビの中での話などではなく、現実の出来事だったのだ。

僕たちは今、毎日三食お腹いっぱい食べられるし、食料は豊富にある。でも、当時の日本では、食べ物は配給制で、食べたと言えるほどの量はなく、ザリガニやシジミ、道ばたに生えている草まで、食べられそうな物は全て食料とすることで、なんとか空腹をしのいでいたのだ。

学校生活も全然違っていた。戦時中は英語の授業は禁止され、代わりに、三角巾の使い方や傷の手当ての仕方を習い、男子は銃剣、女子は竹やりの訓練をさせられた。本土決戦に備え、女性も子どもも「国民皆兵」の旗印の下、敵兵に立ち向かう「日本兵」として扱われていた時代だったのだ。話を聞いた時の、「ひ孫にはあんなことはさせたくない。」と言っていた曾祖母の悲しそうな表情が忘れられない。

また、軍事工場での話は特に心に残っている。高射砲の側板をスライス板で削る作業を、日光の当たらない薄暗い工場でしていたという。ただでさえ栄養不足だった上に、壊血病と歯ぎん炎という病気にもかかり、入院したそうだ。僕と同じような年頃だったときに曾祖母がそんなにつらい思いをしていたことを知って、僕は言葉が出なかった。

国民を苦しめた戦争は、昭和20年、広島と長崎に原子爆弾が投下され日本が無条件降伏したことでようやく終わった。それから七13年。戦争を経験した人たちも少なくなり、曾祖母から話を聞けることはとても貴重だと思っている。

戦後、大きな復興を遂げ、日本は平和な世の中になった。しかし、世界ではその後も戦争が絶えない。湾岸戦争やイラク戦争、近年ではシリアやウクライナの内戦などが現在も続いている。きっとそれらの国々では、子どもやお年寄りなどの罪のない弱い人たちが、大勢犠牲になっているのだろう。そして、今の日本もまた、他国の軍事力におびえ、いつ一触即発の状態に陥ってもおかしくない状況にあるように思える。

戦争や争いごとをせず、みんなが仲良く平和に暮らす世の中になることは不可能なのだろうか。一人ひとりが優しい気持ちで他人に接し、思いやりをもって行動すれば、争いごとや戦争などはおこらないのではないかと思うのだが、僕の考えは甘いのだろうか。少なくとも今の僕は、平和で充実した生活を送れている。僕の周りの家族や友達も、きっとそうだと思う。その積み重ねが「平和」につながるのではないだろうか。

「雨垂れ石を穿つ」ということわざがある。小さな力でも根気よく続けて

いれば、いつか成果が得られると信じ、平和な未来を築けるように、僕は、今自分にできることを精一杯やり続けていきたい。

平和が当たり前になりますように

原中学校　　２年　　久保田　こころ

小学校低学年のことです。おもちゃの修理をお願いしに、おもちゃの病院へ行った時、たまたまベトナムの写真が、展示されていました。ベトナムの写真といっても、きれいな景色などではありません。ベトナム戦争で被害を受けた人達の写真でした。アメリカ軍がまいた枯れ葉剤の被害を受けた人々の様子でした。枯れ葉剤の影響で、手が足の 方から生えてきてしまったり、指が1本なかったりというものでした。その写真を見てから5年は経っているのに、まだはっきり覚えているので、当時の私には相当な衝撃だったのだと思います。

戦争はいけないことだと思います。戦争をしたい人なんていないと思います。ベトナム戦争に限らず、私が知らないだけで、世界中で被害を受けて苦しんでいる人達が今も存在します。多くの人が、戦争に反対していてもこのような現状ということは、日本の平和は当たり前のことではないのかもしれません。

8月6日、日本中で黙とうする姿が毎日テレビで流れます。広島の原爆で亡くなった人達のために、被害を受けてずっと苦しんでいる方々のためにみんなが平和を祈っています。戦時中の記憶を思い出している方もいるでしょう。祖母に聞いた話では、祖母のおじいちゃんも戦争で被害を受けています。武器を作る工場で、機械に巻き込まれて両 足の膝下を失くしています。今みたいに立派な義足も車いすもなく、命は助かりましたが、家族は大変だったそうです。祖母のお母さんは、東京に住んでいたそうですが、空襲から逃れるために、沼津市の知り合いを頼って疎開してきたそうです。祖父のお父さんは、戦争に連れていかれたので、お母さんはとても苦労をして家族を守っていたそうです。原爆にこそあっていませんが、私の祖先も辛い思いをしてきたことを知りました。

昨年、学校の平和学習で、講演を聞いたり『はだしのゲン』を見たりしました。来年は修学旅行で広島に行くことが決まっています。話を聞いたり、授業で習ったりしてはいても、実際に被害を受けた場所へ行き、今よりもっと知ることは怖い気もします。特に、原爆ドームは、その当時の様子が肌身にせまってきそうで怖いです。しかし、当時の大変さや、辛い思いをしっかり受けとめたいと思っています。

こうやって戦争について考えると、今の生活がどれだけ幸せなのかを実感できます。しかし、いつの間にかこれが当たり前になっていきます。そして、

何かをうらやましく思ったり、少しのことでイライラしてしまったり、この時代に生まれた有難みを忘れてしまいます。少し前には、アメリカと北朝鮮の間で本当に戦争が起こるかもしれないと、世界中で不安な時期がありました。もしそうなったら今普通にしている様々なことが、無くなってしまいます。朝、もっと寝ていたいとか給食で嫌いな野菜を食べたくないとか、今そう思っていることがただのわがままだったと感じることでしょう。しかし、それでは遅いのです。

将来の夢はまだ決まっていないし、平和のために何ができるかを考えても、難しくて答えが分かりません。ただ、自分の今の環境を当たり前と思わず、小さなことに感謝できる人でありたいなと思います。私の周りには、医療関係の仕事をしている大人が多く、小学生の頃から看護師に興味があります。人の役に立ちたい、助けたいという気持ちがあるので、直接平和のためにはならないかもしれませんが、そういうことを仕事にできればいいなと思います。私達にできることは本当に小さいことかもしれないけれど、同じような気持ちになれば戦争はなくなるのではないかと思います。宗教、肌の色、様々な考え方があり、分かり合うことは難しいとは思います。しかし、平和が当たり前になるよう、まずは当たり前の幸せを実感していきたいです。

長崎を訪れて

原中学校　　２年　　高　橋　紀　寿

長崎。それは世界遺産の多い、人気の観光地であり、広島と同じ原爆が投下された地でもある。

僕は夏休みに長崎に行った。街は路面電車が走り、たくさんの人が行き交っていた。どこを見ても人の笑顔があり、この場所に原爆が落とされたことなど想像もさせなかった。

路面電車を降り少し歩くと、茶色く大きい、ずっしりとした原爆資料館がたたずんでいた。少し緊張した。展示室に入るとまず、被爆前の長崎の街やたくさんの子供たちの写真があった。この後のことを思うと、より悲しみが引き立ち、胸が苦しかった。そして、「11時2分で止まった柱時計」「旧制瓊浦（けいほ）中学校の給水タンク」が再現されていた。この鉄でできた給水タンクの骨組みが曲がり、くずれているのを見ると、それだけで原爆にとてつもない破壊力があったということが分かった。

奥に進むと長崎型原爆、「ファットマン」の模型が紹介されていた。 大きさは約3メートル。こんなに小さな原爆で約7万人の命が一瞬で奪われたかと思うと、その恐怖で、鳥肌が立った。今までに何度か見た空襲とはまるで威力が比べものにならなかった。

実物の被爆瓦があった。
（瓦までもが、爆風によって吹き飛んだのか。）
と思った。しかしこれは違った。近くで見てみると、発砲状の痕跡があった。実はこの瓦は、熱線の直射により表面がすべて沸騰して泡立ったものだったのだ。想像を絶する熱線の恐ろしさを目の当たりにし、
（これが人に当たったら……）
と想像するだけで恐ろしい。
近くに1枚の写真があった。ローターで押しつぶされたような瓦礫だった。すると思わず、目をそらしてしまった。なんと黒焦げの焼死体が何体も転がっていたのだった。誰なのか、もはや男か女かさえも分からなかった。他にも親子で黒焦げになっている死体があった。黒焦げであるにもかかわらず母親の表情がうかがえた。母親は目を開けてこちらを見ている。まるで何かを伝えているかのように。原爆そして戦争なんてやってはいけない、と訴えているようにも感じた。この子に夢はあっただろうか、そうした夢や希望が一瞬で、命とともに奪われる。
展示室の最後に被爆者の証言を聞いた。「のどがとても乾いた。」という話、「妹が家の下敷きになった。」という話……。どの話もとても鮮明で具体的すぎて、その場所にタイムスリップしたかのようだった。戦争から長い時間がたった今でもこのように話せるというのはこの原爆がいかに恐ろしいかを物語っているようにも感じた。
（ここまでする必要はあったのか。）
この言葉が頭の中を繰り返し廻る。原爆による死者は約74,000人。その他後遺症で苦しんでいる人は今も多くいる。戦争終結に必要だったと言う人がいるが、決して落としてはいけなかったと思う。喜ぶ人などいないだろう。戦争は悲しみを生み、笑顔、命をもうばう。戦争＝死ともいえるだろう。世界にはまだ多くの核兵器がある。この核兵器は、自国を守るため、他国に対する威かくのために持っているのだろう。人の命、笑顔、家族。そして平和をまもるため、日本は世界で唯一の被爆国として、この核の恐ろしさを伝え、非核化していくことが使命だと思う。
最後に資料館を出て平和記念公園を訪れた。あの日から半世紀が過ぎ、被爆者は年老い、被爆体験の風化が急速に進みつつある。だからこそ戦争を知った僕が戦争の悲惨さ、原爆の恐ろしさ、平和の大切さを伝えていかなければならない。平和は一人ではつくれない。しかし、この一人一人の思いが平和に繋がる。世界から、核そして戦争が1日でも早くなくなって欲しい。平成最後。平和祈念像の前で、そう願った。

笑顔

原中学校　　３年　　山　本　茉　奈

顔に怪我を負っている人の写真、足を失った人の写真、黒焦げになってしまったお弁当の写真……。私は小学2年生の時、長崎の原爆資料館へ行った。その時見たたくさんの写真のあまりの痛々しさに、言葉を失って写真の前で立ちつくしていたのを今でも覚えている。その時、小学2年生ながらに「こんなこと2度と起こしてはいけない。」と思っ た。数年がたち、小学六年生になった夏、終戦から73年という月日がたっていた。その年の夏休み、私は隣の家に住んでいる親せきのあばあさんに、戦争について話を聞いた。そのおばあさんは、関東地方のように大きな被害を受けたことはなかったと言った。私はその時、

「じゃあ静岡県に住んでいる人たちは戦前と変わらない暮らしをしていたんだね。」

と何気なくつぶやいた。しばらく、おばあさんが何も言わなかったので、不思議に思って顔を見ようとした。しかし、おばあさんは顔を見られたくないかのように、口を開けて、

「戦前と変わらない暮らしができるわけがない。明日空襲の被害にあうのは静岡県なのかもしれない。もし、その被害にあったとき、私は死んでしまうのかもしれない。そんな事ばかりを想像して、毎日おびえて暮らしていたよ。みんな今を生きるので精一杯だった。だから、誰一人として、笑顔でいられる人なんていなかったんだよ。」

と、戦時中のことを思い出して言った。きっと悲しそうな顔をしていたんだと思う。声が震えていた。もしかしたら、泣きそうなのを必死にこらえていたのかもしれない。しばらく沈黙が流れた。おばあさんは沈黙を破って、

「だからね、茉奈。絶対に戦争なんてしてはいけない。これ以上、戦争で悲しい思いをする人を、増やしてはいけないよ。」

と言った。私の目をまっすぐ見つめて。とても優しい声で。きっと、こんな時は、「分かった。」とか、「うん。」とか、言うべきなのだろう。けれど私は、声を出すことができなかった。というよりは、声が出なかった。だから変わりに、力強く頷いた。おばあさんの目をしっかりと見つめて。

近年の日本は平和だ。とても良いことだと思う。しかし、平和すぎるがゆえに、人が死ぬということの重みを知らない人がとても多いと感じる。そのような人の中には、ネットに「死んでほしい」と書き込む人もいる。戦争では死にたくないのに、死んでしまった人だってたくさんいるのに……。最近の人は戦争について知らないことが多いから、このようなことが起こってしまうのではないかと思う。今では戦争で体験したことを語られる人が減っている。語られる人が一人もいなくなる前に、1度だけでも話を聞くべきだと思う。そうすれば、人を傷つける言葉を言う人が減ると思う。それに、戦争について考え直すと思う。考え直して、たどり着く答えは、「2度と戦争はしてはいけない。」という答えであってほしい。そうなれば、笑顔の人が自然に

増えると思う。きっとそれが、本当の「平和」になるということだ。
　生きている全員の人が笑顔になることを私は願う。

戦争が残した傷

浮島中学校　　３年　　藁　科　利　理

　私はある日、学校の授業で戦争について学びました。社会の授業では太平洋戦争のことを、国語の授業では原爆について語られた詩について学びました。戦争が恐ろしく怖いものだととても分かりました。
　私は、二つの授業で学んで、もっと詳しく知りたいと思ったので、インターネットで原爆のことを調べてみました。すると、1枚の写真が目に止まり、衝撃的で今でもよく覚えています。それは、焼けた人間の死体でした。どろ団子で作った人形のような感じで、まだ大人ではない子どもの写真でした。こんなことが本当に日本であったのかというくらい、今の日本では考えられないほどで、残酷で冷酷な写真に、私はただただ驚くばかりでした。この人にはまだこの先人生があったのに……。
　私は、国語で原爆についての詩を読み、意味を理解した時、筆者の思いや願いが心に響きました。その詩は「挨拶」という題名で、石垣りんさんという方が作りました。私は、この詩を初めて読んだとき、友を失ったのかなと思っただけでした。授業で詳しくやっていくうちに、この詩の重さ、石垣りんさんがこの詩にかける思いが分かったよ うな気がしました。この詩は、今の世界を生きている私たちが、地球上に原爆は数百個も存在するのに安心しきっている姿や、再び原爆を落とされることがあるかもしれないことを伝えています。筆者のりんさんは、危機感を持ち、油断してはいけない。戦争や原爆の恐ろしさを忘れないで、というメッセージを私たちに伝えてくれているのだと分かりました。原爆は体だけでなく、人の心までも傷つけるものです。
　私は、改めて考えてみても、どうしても戦争をすることが良かったなんて思えません。原爆は何も悪いことをしていない、老人や女性、子どもたちから希望や夢をうばって、心や体を傷つけました。しかし、戦争を終わらせるためには仕方がなかったと言う人がいます。女性や子どもたちは夢や希望、幸せな人生を送れるはずだったのに、戦争を終わらせるためなんて私には理解できません。戦争を終わらせるためだったら、たくさんの命を犠牲にしていいなんてありえません。同じ人間同士が殺し合うなんて必要ないのです。私は、戦争の恐ろしさや怖さだけでなく、戦争は人の心までも壊す破壊力を持っていることが分かりました。これから、危機感を持ち油断しないように暮らしていきたいです。そして、いつか核兵器がこの世からなくなることを願っています。

終戦記念日に思う

今沢中学校　　１年　　赤　尾　　翔

8月15日は終戦記念日です。昼に黙とうをしました。でも目をつぶっても、戦争のことはよく分からないので、（長いなー。まだかなー。）と考えているうちに黙とうが終わってしまいました。これを機会に戦争について考えてみることにしました。

僕は2年前の小5の時、母と姉と一緒に富士のロゼシアターでやっていた戦争展に行ったことがあります。そこでは、富士や沼津の空襲について、パネルで紹介していたり、実際に落ちてきた焼夷弾、穴のあいたリュックなどが展示されていたりしていました。ボランティアでガイドをしていたおじいさんが、沼津や富士での戦争の様子を教えてくれました。多くの人が沼津でも命を落としたことを知り、沼津もこんなに多くの被害にあっていることにおどろきました。日本が戦争をしていたことや、広島や長崎に原爆が落とされたことは、教科書で見て知っています。自分の身近な場所の戦争中の様子は考えたことがなかったので、僕は、この時代に生まれてこなくてよかったと思いました。

ニュースで他の国の戦争の様子を見ることがあります。僕くらいの子どもも銃を持って戦っていたり、大けがをしたり、親を失った子もいます。どんな気持ちなんだろう、よく分からなかったので、母に聞いてみたら、「ほたるの墓」のDVDを見せてくれました。

1時間半、僕は息をのんで見ました。

中学生のお兄ちゃんが妹を守りながら、戦争時代を必死で生きていました。空襲で家が焼けたり、両親が死んだり、食べものがなかったり……。僕には考えられないことです。食事ができなかったことはありません、お風呂に入れなかったこともないし、布団で寝られなかったこともありません。夏休みの今、熱中症にならないように、一日中エアコンの効いた部屋でソファーに寝転びながらゲームをして過ごしています。こんな当たり前の生活が戦争中はできなかったんだなあと感じました。毎日生活をしていますが、僕は生きるために生活をしていると思ったことはありません。明日がないと思ったこともありません。毎日朝起きるのがめんどうで、勉強するのがめんどうで、嫌いなおかずに文句を言い、平和が当たり前の世界で生きています。すごく幸せなことだと思いました。この平和な生活が戦争をしている国の人にも来るといいなと思うし、戦争は絶対にいけないと思うようになりました。

平和な世の中がこれからもずっと続くように、終戦記念日には、戦争のことを考えて、来年の終戦記念日の黙とうは命の大切さを考えて黙とうしたいと思います。

今日は八月十五日

今沢中学校　　１年　　谷　川　彩　月

今年で終戦から73年が経ちました。ちょうど、私の祖父は戦時中に産まれて、今年で73歳になります。祖父に戦争のことについてたずねると、その時のことを少し教えてくれました。

祖父は、1944年にこの沼津で産まれました。祖父が産まれて間もない時、1945年7月17日、沼津大空襲にあったそうです。その当時のことを、母も今は亡きひいお婆ちゃんに幼いころたずねたそうで教えてくれました。ひいお婆ちゃんは、赤んぼうだった祖父を背負って水の張った田んぼに、必死に逃げたそうです。そして、あまりにも田んぼの中に長く居たせいで、祖父の足は水でふやけてしまっていたそうです。母は、今は亡きひいおじいちゃんのことも教えてくれました。ひいおじいちゃんも戦争体験者で、母は戦争のことをたずねたそうなのですが、ひいおじいちゃんは1回も戦争のことについて話すことはなく、亡くなるまで何も語ってくれなかったそうです。母はひいおじいちゃんの部屋で、亡くなった後、軍服を着たひいおじいちゃんの写真を発見したそうです。

私が戦争のことについて祖父に聞いていると、一つの番組を紹介してくれました。その番組は、戦争で親を失った戦争孤児たちの戦後史を取り上げていました。その中で、今になって戦争のことを語っている戦争孤児の方がたくさんいました。話を聞いていると、どんどん吸いこまれて、悲しいところでは泣いてしまいました。親が亡くなったときの話、そのときに引き取られた所での差別や暴力を受けた話など、私には想像もできない話がたくさんあり、衝撃を受けました。中でも、一番私が衝撃を受けた話があります。それは、戦争孤児の仲間が自殺をしてしまったという話です。目の病気で右目が見えなくなってしまっ たという孤児の男性の方に、付きっきりで背中をさすってくれていた仲間の孤児が、電車に飛び込み自殺をしたというのです。そのことを思い出し、語っている男性は泣いていました。それにつられて私も泣いてしまいました。そんなにつらいことを思い出させて話をさせてしまって申し訳ない気持ちになりました。そう思うと、ひいおじいちゃんが話してくれなかったのは、この男性と同じように、とてもつらい思いをしたからだったのではないかと思うようになりました。何も体験していない私には、察することができません。そのことは、きっと口にすることができないくらい、つらい体験だったのでしょう。

私は、この作文を書くために、戦争についてたくさんのことを調べて、見て、実際に聞くことをしました。それによって、初めて知ることや、初めて聞くことができて、とても良い機会だったと思います。もしかしたら、今こうや

って戦争のことを話してくれているおじいさんやおばあさんの貴重な話を聞けるのは、私達の時代だけかもと母に言われました。ならば、私達はその話を忘れないよう、これをきっかけにして、たくさんの戦争の話を聞きたいと、思いました。また、それを後の世代につなげて行かないといけないと思いました。

戦争は、私の祖父が赤んぼうの時にあったと聞いたときに、戦争が一気に身近に感じられました。遠いと思っていても、この日本で今、起きていないだけで、この世界のどこかで、今、実際に起きていることだと感じました。戦争は幸せをうばっていく、戦争がなければたくさんの人が幸せだったのではないか、この作文を書いていて改めて思いました。今日は8月15日です。戦争のことを心に留めて、成長していきたいと私は思いました。

生きて帰ってきて良かったよね

今沢中学校　３年　池　真　央

「早く準備して。出掛けるよ。」

お盆になると、私の家では毎年、お坊さんが来て棚経を上げる。近所にある母の実家と自分の家とをせわしく行き来し、お経を聞く。

今年もまた、お坊さんの背中を見ながら、しびれる足を気にしていた。ふと、仏壇の部屋に飾ってある賞状の中に「佐藤栄作」という文字を見つけた。

最近、歴史の授業で出てきた名前だった。その横には、セーラー服を着たような若い青年がこちらを見ている古い写真があった。

毎年、見ているが、今年は何だか気になった。お坊さんが帰った後、祖父に尋ねてみた。あの写真の若い青年は、曾祖父の一番下の弟で、賞状にもある忠男さんという名前の人だった。祖父もほとんど知らない様子だった。母によると、曾祖父から幼い頃聞いた話だと、忠男さんは、海軍に所属していて、どこかの海で亡くなり遺骨もないそうだ。当時、嫁に来た曾祖母と同じ年だったようで非常に優しく穏やかな人だったという。ただ間もなくして戦争に行ってしまったということだった。そして、海で亡くなったと書面で知らせだけが届いたそうだ。

曾祖父は、どんな気持ちでその知らせを聞いたのだろう。なぜなら、曾祖父の生きた時代は、お国のために命を懸ける時代だったはずだ。そんな中で一番若い弟を戦争で亡くし、自分だけが生きている。曾祖父は、陸軍でマレーシアや満州などにいた。戦地で鉄砲玉に当たり足を負傷した。その怪我は大したものではなかったらしいが、入院先の病院で兵士同士の喧嘩に巻き込まれ失明してしまった。危篤状態になったが回復し、帰国することになった。

私は、写真の中の曾祖父しか知らない。眼鏡をかけ、にっこりと笑っている。とても戦地で戦ったようには思えない。でも、母によると夏になり半ズボンになると足の銃弾の傷跡を見せてくれたという。そして、片目は義眼だったとも……。

大正・昭和・平成と生きた曾祖父は、どんな人生だったのだろう。お国のために捧げきれなかった自分の人生と、家族とともに生きた戦後の時代。お国のために亡くなった弟と最後まで戦えなかった自分……。

今の私なら、迷わずどんな形でも生きて帰ってきて家族との時間を大切にする。曾祖父にも聞いてみたい。

「生きて帰ってきて良かったよね。」

昭和時代の佐藤栄作が、非核三原則を提唱し、沖縄が返還され、日本は平和に向かってきた。これからどんな歩みをしていくのか。私たちは、歴史を学んでいる。繰り返してはいけないことを知るため、忘れてはいけないことを知るためなのかもしれない。戦争はたくさんの命のほかにも、たくさんの人の心を奪ってしまうものなのだ。

私が今年こんな気持ちになれたのは、学校で歴史を勉強したからだ。気にも留めなかった1枚の賞状が私に語りかけたからだ。これからも毎年来る夏は、平和を感じ、戦争の時代を生きた人に感謝しながら過ごす夏にしたい。そして、間違ったことをしない、そんな時代を創っていかなければいけないと感じた。間違っていることを、間違っていると分かるように、学習しなければならない。そして、来年も平和と多くの命に感謝し手を合わせる夏にしたい。

僕たちの使命

門池中学校　　１年　　内　村　亮太郎

僕は、小学3年生の夏、家族で広島に旅行に行く機会がありました。

（こんなにきれいな広島の町に、昔、原子爆弾が落とされたなんて信じられない。）

広島の町を初めて見た時、そう思ったのを覚えています。

広島では、平和記念公園を訪れました。資料館には、考えられないような遺品や写真がたくさん残っていました。被爆して黒こげになって亡くなった人々、全身ひどいやけどで皮ふが焼けただれた人々、見ているだけで痛々しい写真がありました。また、それらの隣には、黒こげになった弁当箱や水とう、足の影が残ったげた、ぼろぼろに破れた服なども展示されていました。それらをじっと見ていたら、この遺品の持ち主はきっともっと生きたかっただろうな、と心が重くなりました。

僕が一番心に残った遺品は、さだこさんの折づるです。たくさんのつるがい

ろいろな色できれいに折ってあり、指に乗るぐらい小さいものもありました。ものすごく小さいつるは、針を使って折ったそうです。

僕は、広島に行くと決まってから、戦争や原爆に関する本をたくさん読みました。特に興味を持った本は、2歳の時に被爆し、12歳で亡くなったさだこさんの折りづるの話でした。話の中にいつも出てくる原爆ドームや平和の子の像は、どんな感じなんだろう、早く自分の目で見てみたいと、強く心に思っていました。この平和の子の像は、さだこさんが原爆病で亡くなった時に、友達が力を合わせて作った像です。さだこさんは、入院してから、病気が治ると信じて千羽づるを一生けん命に折りました。だから、そのつるを見ていると、何としても千羽折って病気を治したかったんだな、もう1度元気になって家に帰りたかったんだなと、このつる一つ一つに強い願いが込められている気がしました。

本物の平和の子の像を見た時は、さみしくて悲しくて、戦争とは本当に恐ろしいものだと感じました。多くの人々が亡くなってしまう戦争は、絶対にくり返してはいけないと思います。僕にとって、この広島での経験は戦争のことをもっと知りたい、調べたいというきっかけになりました。

5年生と6年生の夏には、沼津市に残る戦争の跡を親子で巡るツアーに参加しました。僕たちが住んでいる沼津市も空襲を受けたことを知ったからです。御成橋に残っている被弾跡、防空壕（ごう）、学童集団疎開の受け入れ先施設、海軍技術研究所跡など、10カ所以上も巡り、多くの戦争の傷跡を見学しました。特に多比（たび）にあった海軍技術研究所の地下工場跡は懐中電灯を手にしないと前に進めないほど真っ暗で、夏だというのにひんやりと感じました。工場跡は空襲被害を避けるために石切り場跡の洞窟にあって、その中は外からは想像もできない大きな空間が広がっていました。案内をしてくださった方の話では、沼津は、東京に爆弾を落とすための飛行機の通り道で、東京に落としそびれた爆弾を沼津に投下し、戻っていったそうです。そのことから沼津は「爆弾のゴミ箱」と言われていたと聞き、悔しい気持ちがこみ上げてきました。当時の沼津で生活していた人々は、何とも恐ろしかったことだろう、そして、どれだけの命が消えてしまったことだろう、と改めて戦争の悲惨さを痛感しました。

僕たちは、昭和20年8月を絶対に忘れてはいけません。毎年8月6日、9日、15日には、しっかりと黙とうをしたいと思います。そして、終戦の日には、できる限り戦没者追悼式に参列し、戦争の傷跡をしっかりと見つめ、戦没者の方々や平和について祈りたいと思っています。同時に、普段の生活の中で、もっと世界に関心を持ち、今でもこの世界から戦争がなくならない理由を勉強していきたいと思います。そして、戦争を2度と起こさないために、僕たちがしなければならないことをしっかりと考えていきたいです。

ペンは剣よりも強し

門池中学校　　１年　　川　口　　優

平和について考えるにあたって「ぼくたちはなぜ、学校へ行くのか」という本を読んでみることにしました。

この本は、まず、女子が教育を受ける権利を訴えていたパキスタンの女子学生マララ・ユスフザイさんの国連演説から始まります。その中にある「学校へ行きたいと言った私は、かれらによって、銃で頭を撃たれました。」という一文がとてつもなく衝撃的でした。かれらとは、反政府武装力パキスタン・タリバーンのことです。マララさんの故郷であるパキスタンのスワートという町は、この武装グループに支配されていて、かれらは、自分たちの利益のために、女子が学校へ行くことを禁止しているのです。そのことを知ったとき、最初は、どうして女子が学校へ行くことを禁止すると武装グループたちの利益になるのかよく分かりませんでした。

でも、この本を読んで「ペンは剣よりも強し」ということわざの中に答えがあることを知り、私も何となくその意味を理解することができました。

ペンとは言葉のことです。きちんと声をあげれば、たくさんの人たちが耳を傾けて聞いてくれます。そして、賛同してくれます。マララさんは「その声が消えることはない。だから、一人一人が立ちあがり、声を出していかなければならない。声を出して世の中を変えていくべきであり、そのために必要なのがまず、学校と教育なのだ。」と言っています。たしかに、言葉によって自分の気持ちや考えを表して相手に伝えるということは、とても大切です。教育と平和の関連性と重要さを考えさせられました。

インドでは、大勢の貧しい子供たちが学校へ行かせてもらえず、小さなときから働かされています。ナイジェリアでは、武装グループが「教育は子供には必要ない」と言って、多くの学校を壊し、先生や生徒を殺しています。アフガニスタンでは、女子は幼い年齢で結婚させられ、学校へ行くかわりに、家事をさせられています。

日本では、子供たちは教育を受ける権利をもっています。中学校までは義務教育で、大人は子供を学校に行かせる義務があります。だから、私たち日本の子供は、毎日学校へ行くことが当たり前で、朝から夕方まで、いろいろな科目を勉強します。

でも、世界には、学校へ行きたくても行けない子供たちがたくさんいます。開発途上国と呼ばれる国では、約15パーセントの子供が小学校へ行くことができません。中学校へ通えるのは、わずか約50パーセントです。子供たちはみんな「学校へ行って友だちと遊びたい、本を読んだり、文字を書けるようになりたい、計算もできるようになりたい。」と思っているはずです。産まれてくる子供は、国や親を選ぶことができません。だから、今私が平和な日本にいるのはただの偶然です。平和の中にいる私にとっては、同じ地球上で武装グループに支配されながら恐怖の中で生きている人たちがいるということが信

じられません。
　この本を読んで、世界の現状を知り、考えさせられることがたくさんありました。難しい問題だということは分かりますが、世界中すべての人が平和で安全で安心して楽しく笑い合って暮らせるように、私にできることがあれば積極的にやっていきたいと思います。「ペンは剣よりも強し」私たちが想いを言葉にすることで、世界は少しずつ変わってゆくはずだから。

忘れてはいけない

門池中学校　　２年　　小　平　莉　穂

　終戦から73回目の8月15日。平成最後の終戦記念日となった今日、テレビでは日本各地での追悼式に、戦没者の遺族が参列し、手を合せる様子が映っていました。そこでは、遺族の高齢化が進み、参加者が毎年減少していることが話題になっていました。
「戦争の記憶を風化させてはならない。」
「孫やひ孫に戦争の恐ろしさや、辛い記憶を語り継いでいきたい。」
と、高齢の方が訴えているのを、私はぼんやり見ていました。私も親も、戦争のない時代しか知りません。だから、こういう機会がなければ戦争を思い浮かべることもありません。
　しかし、そんな私にも変化が起こりました。それは数日後のこと。私はお盆には行けなかった祖父母の住む川根へ行くことになりました。その家から歩いてすぐのところにあるお墓にお参りに行った時、墓石に刻まれていた名前と年齢が目に留まりました。
「勝利　1歳」
「岐代子　3歳」
こんなに幼い子がなぜ命を落とさなくてはならなかったのだろう……。そんな思いを持った私は、祖母に聞いてみることにしました。
　戦時中、祖母の一家は地域の人達と一緒に村をつくるために満州に渡ったそうです。そこで生まれたのが勝利さんと岐代子さんでした。けれども、満州での過酷な生活で病気になってしまい、医者も薬もなく十分な栄養もとれないまま、立て続けに亡くなってしまったのだそうです。
　私は、祖母にそんな幼くして亡くなった兄と姉がいたことが信じられませんでした。満州で生まれて、日本を知らないまま1年や3年しか生きられなかった人と、大切な子供を失って生きていかなくてはならなかった人。どちらも言葉にできないほどの悲しみがあると思いました。日本にようやく帰って来ても待っていたのは苦労の日々でした。山を切り開いて住むところを作ることから始めなくてはならなかったそうです。そして娘である祖母はその母親から、子供を亡くすことがどんなに悲しく辛いことか、よく聞かされていた

そうです。

これらの話を聞いて、戦争で大変な思いをした人が自分の身近にもいたことを知りました。そして今、自分が生活している環境がどんなに幸せなのかということを改めて感じました。おいしいものをお腹一杯食べたり、学校で勉強をしたり、友人と他愛ない話で大笑いしたり、私が当たり前にしている14歳の経験も、勝利さんと岐代子さんはできなかったのです。だから私は、2人の分まで生きるつもりで、自分の命、そして他の人の命も大切にしていこうと思いました。また、終戦記念日に見たテレビで高齢の方が訴えていたように、戦争の恐ろしさや、体験した人たちの思いを受け継いでいくのは、これからの自分たちの役目なのだと感じました。

渓流祭の合唱コンクール。私たちは学年合唱で、『HEIWAの鐘』という曲を歌います。この曲には、戦争という過ちを2度と繰り返さないという強いメッセージが込められています。歌詞には、「銃声が鳴り響き海や大地が砕け散る」など、戦争を思い浮かべる部分もあり、自分の大切な居場所や大切な命を失うつらさを読み取ることができる部分もあります。

それでも、「拳をひろげてつなぎゆく心は一つになれるさ」という部分など、明るく、前向きな印象をもてる曲だと思います。学校生活でも、いろいろな考えの人がいて、分かり合えないと思う時もあるけれど、それぞれの価値観を認め合い、力を合わせることは、私にもできる平和への小さな一歩ではないかと思います。

残念なことに、今なお戦争が次の戦争の引き金となり、惨劇を繰り返しているような国や地域もあります。だからこそ、世界中の全ての人が、平和に近づくために自分に何ができるかを考えて手をつないだら、この世界はどんなに素晴らしいものになるだろうと思います。遠い世界の話だと思わず、自分のできることを一人一人が考えていくことが明るい未来に近づくために大切だと思います。人に対して、平等に接すること、思いやりを持って行動すること。まずは、身近なことから始めたいと思います。

「幸せ」を感じる

長井崎中学校　　２年　　海　瀬　　龍

「龍は今、幸せ？」

母に、急にそう訊かれた。簡単な質問なのに、僕ははっきりと答えることができなかった。普段の生活に「幸せ」を感じていなかったからだ。

幸せを感じる瞬間といえば、野球の試合で勝った時や誰かにプレゼントをもらった時くらいだ。誰かと面白い話をしている時に笑っていたとしても、その時自分が「幸せ」だと感じることはあまりない。これが、僕の14年間で「当たり前」となった生活だ。

今の日本は世界の中でも1、2を争うほど安全な国だ。もちろん戦争という恐怖もない。だから僕たち日本人のほとんどは、のんびりと毎日を過ごしている。しかし、73年前までの日本は違った。第二次世界大戦による太平洋戦争をはじめ、日清戦争、日露戦争、日中戦争などで日本は長年にわたり戦争をしてきた。広島、長崎に原子爆弾が投下された太平洋戦争では、多くの日本人が兵士となり、多くの命が失われた。また、戦争の部隊には行かずに苦しい生活をしていた人も大勢いたという。

僕がその苦痛さを知ったきっかけは、映画「火垂るの墓」だ。僕がこの映画で印象に残っているのは、主人公の幼い妹が飴1つでとても喜ぶシーンだ。今の日本だったら「えっ？これだけ？」と思うだろう。だが当時はそれだけ食べ物が無かったということが分かる。映画では、ご飯の量も少なく、水のようなおかゆや雑草を食べていた。今の日本では、ハンバーグや唐揚げなど毎日美味しい料理でお腹を満たすことができる。これも戦時中にはありえないことだ。僕らが毎日何気なく食べている食事は「当たり前」ではなく「幸せ」だということを、現代の日本人は知っておかなければならないと僕は思う。

今年で夏の全国高校野球選手権大会（通称「甲子園」）は100回目を迎えた。僕も野球をしているので、多くの高校生の活躍に毎日見入ってしまった。太平洋戦争の影は当時、この甲子園にも大きく影響していた。

野球用語には、「ストライク」や「アウト」などといった英語が用いられている。現代では当たり前に使われているこの言葉は戦時中禁止されていた。なぜなら、戦争の敵はアメリカやイギリスだったからだ。敵性語として英語を使うことは禁止されていたのだ。例えば「ストライク」は「よし1本」、「アウト」は「ひけ」というように、全て日本 語に変えられた。

この時代は、スポーツでさえ自由にできなかったのだ。このことを知った時、僕は戦争が何の関係もないスポーツにも影響していたことに衝撃を受けた。今、平和な中でやっているスポーツは決して当たり前にできているわけではない。誰かが支えてくれ、平和な世の中があるからこそできることなのだ。

戦争のない平和な今、できてとても「幸せ」だということが、できて当然「当たり前」になってしまっている。けれども普通の生活、普通の生き方ができることだって幸せなことだ。73年前日本とアメリカが刃を向け合った時代にはできなかった多くのことが今は自由にできるようになった。先の大戦で亡くなってしまった方のためにも、幸せを噛みしめてできることに全力を尽くすことが僕たちの使命だと僕は思う。部活の練習や勉強に対して「面倒くさい」「やる気ない」と言う人が多くいる。何の関係もない人、街、そして物までをも巻き込んでいくあの戦争を2度と繰り返してはいけない。だからこそ「幸せ」な今を何事もめげずに誰もが堂々と「自分は幸せだ。」と言える世界になったら、それが本当の「世界平和」につながるのだと思う。

平和について考える

市立高校中等部　　３年　　川　原　果　実

私は、今年の10月に修学旅行で広島に行きます。私は、平和について考える必要があると思いました。

学校の授業で、戦時中の生活体験を聞く授業がありました。戦時中は、「ぜいたくは敵だ」と言われていました。戦時中の生活は、ご飯が食べられなかったり、物が買えなかったり、大変な生活が続いていました。そんな生活の中で、お父さんやお兄ちゃんなど自分の家族に「召集令状」が発布され、国のために戦争に行かなければいけなくなってしまう家が多くあり、家族が亡くなってしまっていました。

この話を聞いて私は、絶対に戦争をしてはいけないと思いました。戦争は、人の命をうばう悲さんなものだからです。戦時中の生活を自分に重ねてみると、私は生き延びることができていたのかと思います。私達が今ぜいたくな生活ができているのは、昔の方々のおかげだと思います。

しかし、今でも戦争をしている国が多くあります。未だに核兵器の開発をしている国やミサイルを飛ばしたりなど、今の世界は完全に平和になったわけではありません。

私の曾祖父は、戦時中戦争には行かず戦争で戦うための潜水艦を作る研究所に務めていたそうです。家族としては、戦争に行かないことはうれしいことですが、戦争で使う武器を作っていると思うととても複雑な気持ちになりました。

私の曾祖父も作っていた潜水艦や現在色々な国が作っている核兵器やミサイルによって一瞬でたくさんの人々の命がうばわれてしまいます。また、ミサイルや核兵器などの間接的な武器だけでなく、人間そのものが武器になる人間魚雷や特攻隊のような武器（作戦）があったことは今の日本では考えられないことです。

以前、私は茨城県にある予科練平和記念館に行ったことがあります。そこには、海軍パイロットを目指した少年達の日常生活や戦争に対する思いを知りました。特攻隊員の戦地に旅立つ時の母に対する感謝の手紙を読みました。その手紙には特攻隊員に選ばれた喜びや誇りに思うことが書かれていましたが、それは本心ではないと思いました。私は、こんなにもつらいことがあるのかと思いました。また、この記念館には、特攻隊員が身につけていたという衣類が展示されていました。その上着の小さなポケットの中に家族の写真と家族からもらったお守りが入っていました。2度と戻ってこないと分かっていながらも、お守りを渡す家族の気持ち、死ぬと分かっていながらも最後はやっぱり家族といたいという気持ちで持っていく家族の写真、想像すると胸

がしめつけられるような思いでいっぱいです。
　このようなことは、今の若い人達には未知の世界で、想像もつかないことです。しかし絶対に忘れてはいけないことだと思うので、一人でも多くの人に戦争について考えてもらえたらと思います。

唯一の被爆国に生きる者としてできること

暁秀中等部　　２年　　関　　佳那子

　1945年、8月6日、午前8時15分、幸せな日常は一瞬にして、地獄絵図そのものになった。広島に原爆が落とされたのだ。
　私は小学6年生の時、広島の原爆資料館を訪れました。黒く焼けて、中に何が入っていたのか分からないお弁当箱。血のあとが残り、ぼろぼろに裂けている少女のワンピース。がれきの中をさまよう、皮膚がたれさがってしまっている親子の人形。特に燃え盛る街を歩いている、うつろな目をした人形を見た時は、かなりの衝撃を受けたことを覚えています。
　原爆資料館では被爆者の方々のお話も聞くことができました。原爆が広島に落ちて、街は火の海になり、即死状態の人はもちろん、手や足がない人や火傷で体の皮膚がはがれてしまっている人が多くいたといいます。そしてその人たちから
「水をくれ。水をくれ。」
と言われながら、また自ら水を求めて川に飛びこむ人を見ながら、必死に家に戻ろうとするしかなかったと被爆者の方は話していました。私はそれを聞いて、話をしてくださった方は助けたくても助けられないという自分の無力さを感じて、とても辛かっただろうと思いました。さらに広島の人たちの命を奪ったのが、黒い雨です。黒い雨とは、原爆の落下によって発生した多量の灰や、有毒な化学物質、放射性降下物などを含んだ粘り気のある雨のことで、空から降ってきたため多くの人が大量にあびてしまったといいます。そしてこの雨によって、後遺症をわずらったり亡くなったりした方が多くいます。人々は、原爆が落下した際の爆風や大けが、大火傷だけでなく、放射線や放射性降下物による被爆と戦いながら亡くなっていったのです。
　そんな中、必死に戦って生き残った方々が、今私たちに原子爆弾の恐怖を教えてくださっている、被爆者の方々です。私は原爆資料館で多くの展示物を見たり話を聞いたりしたことで、改めて被爆者の方々の強さを感じました。資料館で流されていた映像でも、当時私よりも小さな子供だった方が
「防空壕（ごう）の中に家族ではなく、近所の人しかいなかった。」
「父と母を一人で探した。食料も一人でなんとかするしかなかった。」
と言っているのを見ました。もし私が原爆で家族や親せきの命を奪われ一人

だけ残ったとしたら、どのようになるか、今の私には全く想像できません。生きていくためにどこで食料を手に入れるのか、どこへ行くべきなのか、ということを考えられないかもしれません。しかし、被爆者の方々は自分が生き残ったことを責めながらも、亡くなった人々の分まで一生懸命生きよう、と考えていたに違いありません。その意志がなければ、生きのびることはできなかったのではないかと私は思います。

昨年、核禁止条約が国連で採択されました。しかし、日本はアメリカの「核の傘」に守られているという理由で、核禁止条約に参加していません。唯一の被爆国である日本が、核禁止条約に参加しないという現状について、私はこのままではいけないと思っています。唯一の被爆国であるということは、核兵器の影響力やその恐ろしさを最もよく知っているのは日本だということになります。被爆者だけでなく、原爆のことを学んだ私たちも、日本人として世界の人々に原爆が投下された後に起こったことを、詳しく知らせる努力をすべきだと思います。そして日本が核禁止条約に参加して、他の国の代表や人々に、やはりこの条約は自分たちにとっても世界にとっても必要なものだということを、認識してもらいたいと考えています。

最後に、私たちが平和のためにできることは、まずは原爆についてもっと学ぶことだと思います。被爆者の方に話を聞いたり、核兵器廃絶のための署名運動をしたりすることもできるでしょう。そして、私たちが学んだことを伝えていかなければなりません。核兵器や原爆の恐ろしさだけでなく、被爆者の方の思いを多くの人や後世に伝えるため、自分ができることにこれからは積極的に参加してみるつもりです。

世界平和と日本の役割

暁秀中等部　　２年　　星　屋　菜那花

「今世界は平和か。」と問われた時、あなただったら何と答えるのだろうか。私は少なくとも日本は平和だと思う。平和ではないと思った人も、毎朝銃の音で目が覚める人はいないだろう。私たち日本人が目覚ましで起きて、朝食を食べているとき、銃の音で目が覚め、朝食どころじゃない子供たちは大勢いる。

ここであなたに思い出して欲しい人がいる。2014年のノーベル平和賞を受賞した少女の事を覚えているだろうか。マララ・ユスフザイというパキスタンに住む少女である。彼女は教育を受けるために、イスラムの武装勢力と戦った。私たち日本人は、義務教育という法律があるため彼女と違いみんなが教育を受けることができる。しかし、パキスタンでは、女性は教育を受けるべきでは無いと考える人が多くいる。マララはそのような考えを持つ相手に立ち向かい、頭を銃で撃たれた後も懸命に訴え続け、世界にその状況を知ら

せる事ができた。女性は教育を受ける必要がなく、家事や出産、子育てをやっていれば良いという考えが、男女の差別を生み、抗争を生み、平和とは言い難い状況を作っているのだと思う。

女性も教育を受けるべきだ。まだ日本では労働時間の差のために、男性の方が女性より高い給料がもらえるという現実がある。しかし、女性にも企業で働く権利、教育を受ける権利はどんな国のどんな宗教においても必要だと思う。教育を受けさせる事で国は発展し、教養を身につける事で内戦や紛争を起こさずに問題を解決する方法を見いだ せるようになる。それを踏まえ、女性は家事や出産、子育てをやっていれば良いと考える人々を納得させるために、まずは勉学と家事を両立させる事が重要だ。本来は不公平な方法かもしれないが、現存の男女の不平等を平和に変えていく打開策として、女性は家事と勉学の両立が不可欠だ。

ヨーロッパの多くの国々では、仕事もしながら家事をこなす男性も少なくないらしい。そんな生活風景を見たら、パキスタンの人々はどう思うのだろうか。教育概念を変えるのだろうか。私は世界中の国がより平和に近づくためには、まず世界の子供たちが皆、教育を受けられるようにするべきではないかと思う。教育は人を成長させ、国を発展させ、その結果、戦争などの争いごとを無くす方向に導いてくれるのではないか。

では教育を受けさせるべきでは無いと考える人のいる国ではなく、教育を受けさせてあげられないという国について触れてみる。世界中には教育を受けていない子供たちが6100万人もいる。教育を受けさせてもらえない子供たちの多くは、両親に教育より労働を優先させられている。その多くの大人たちは自分も同じように教育を受けなかっ たために、教育を受ける良さが分からないという。もし実験的にでも国が教育を義務付けたら、彼らも教育の与える効果が計り知れない事に気づくだろう。子供の教育期間が1年延びるごとに、その子供たちの収入は約10パーセント増加するといわれている。彼らの親がこれを知っていたら、皆子供たちに教育を受けさせようとすると思う。どんな方法でも、人々に教育を受ける大切さを教えることは大事だ。例えば日本がある国に学校を建設し、無料で毎日昼食を提供する活動が、皆に知れ渡ったら、すぐに子供を学校に通わせようとするだろう。すると子供は、栄養と教育の両方を得ることができる。やがて彼らが大人になったとき、その国が先進国になっていたら、日本はあらゆる面で援助してもらえるかもしれない。このように、どこかの国が教育を受けることで、世界は大きく変わる。ごく当たり前に教育を受けている日本人はこのすごさに気が付かない人が多いと思うが、教育は、一人を助け、その家族を助け、国を助け、そして世界をも助けられる最強の武器なのである。

私たちが世界を平和にするためにできる事それは、子供たちに教育を受けさせることが出来ていない国を積極的に助けられる国に、日本を発展させる事だと思う。

交流が築く平和の砦

暁秀中等部　　３年　　立　松　みどり

私達人間は、都合が悪いことは忘れようとし、現実から目を背けることが得意である。だから、落ち込むような出来事が起こっても、私は毎日のほほんとしていられるのだ。しかし、たった一つ忘れてはいけない出来事がある。戦争だ。

毎年8月上旬になると、テレビで戦争特集が放映される。去年までの私は、戦争の番組を見ても強い感情は抱かなかった。戦争は悲劇を与えたんだ、これからも平和を守っていかなくてはならないんだ、としか思わなかった。自分自身としても、そのような感情しか抱かないことは仕方がないことだと思っていた。なぜなら、戦争は私が生まれる約60年も前に起こったことだから。

先日、学校の授業で「映像の世紀」というビデオを鑑賞した。私の「戦争と平和」という言葉への思いが変わった。これは、第二次世界大戦の始まりから終わりまでのもので、実際の映像を含んだビデオには目をそらしたくなるシーンが多々あった。私のクラスメートには目を伏せる者もいた。私が特に衝撃を受けたのは、嘲笑を浮かべた人々に囲まれ、カメラを悲しそうな目で見つめている丸刈りにされた女性であった。彼女はドイツ兵を恋人としていたことで見ず知らずの人々からひどい仕打ちをされていたのである。同じ女性として、自分が恋した人が違う人種だったからといって、仕打ちを受けることなんて考えられなかった。「グロい」「もうこんなの見たくない。」これが「映像の世紀」を見て、皆が口々に言った感想だった。私も同じ思いだった。ビデオを通して見る断片的な悲劇さえも私達は見たくなかった。でも、73年前に生きていた人々は否応無しに自らの目で見なければならなかったと同時に、この戦争の惨状を「当たり前の状態」として捉えていたのだろうか。そして今も、世界では争いが絶えない地域がある。3億5700万人の子供達が紛争地域に住んでいて、その人数は増加傾向にある。今までの遊び場は戦争となり、子供達が自爆兵として駆り出されていく。特に内戦が起こるシリアの凄まじい現場は、そこで暮らさなければならない子供達に、また大人達にも毒性の高いストレスを与えている。

では、なぜ戦争がなくならないのか。それは、私達の勝手な思い込みが原因なのかもしれない。世界には多くの国があって、様々な人種、様々な文化、様々な宗教や思想がある。皆がそれぞれのバックグラウンドを持っている。そこに生きる私達は、自分達の枠にとらわれることなく、もっともっとたくさんの人々と交流することが大切だと思う。人々との交流は、想像していた勝手な思い込みを良い方向へ導いてくれる最善の方法だと私は思ってい

る。
　私のクラスには様々なバックグラウンドを持った人達が集まっている。ある友人はアメリカと日本のハーフであり、ある友人は中国とイギリスのハーフで、英語、中国語、日本語を使いこなすトライリンガルだ。様々なバックグラウンドを持った人達が集まる私のクラスは、男女共に本当に仲が良い。クラスメートの何人かとは幼稚園の頃から一緒で、交流が長く、お互いのことを良く理解し合っている。だからといっていつもくっついているわけではない。新しい仲間が増えれば、自然とお互いが溶け込むことができる。毎日の交流は、多くの発見と、友達同士が分かり合える良い機会となっている。私達のクラスのよう な人間関係が、もっと多くの人々の間で、当たり前であったらと思う。私利私欲の為に争うのではなく、自然と手を差し伸べられる世界であってほしいと思う。もっと分かりあえる人間関係を築く、そのために私達ができること、それは、与えられた多くの人々との交流のチャンスに一歩を踏み出すこと、それは新しい発見と、国、文化、思想、様々 な違いを理解し、お互いに分かりあえる一歩になると思っている。

平和になるために

暁秀中等部　　３年　　山　田　彩　月

　「平和」って何だろう。ふと私は思いました。夏休みには、原爆が落とされた日、終戦を迎えた日など「平和」について考えさせられる日がたくさんあります。今、私たちの周りでは、核の問題があったり、国によっては紛争が起きていたり。世界的にみれば、まだまだ問題がたくさんあります。しかし、自分のすぐ近くには、そこまで大きな問題もなく、問題と言えばテストの点が伸びないだとか親とケンカをしてしまった……、位でしょうか。そう考えると、私たちの身近なところは平和であると感じます。この世界の中には、平和なところと平和とは言えないところがあります。世界は一つ、地球は一つなのに。
　今、日本が戦争や紛争もなく過ごしていけているのは、昔の人たちのお陰だと思います。戦争をしていたことは良くないことですが、戦争を終わりにし、非核三原則などを掲げ、平和に向かおうとし、努力し始めたことで、今、私は平和に過ごせていると思います。
　8月6日、私はテレビで、広島の平和記念式典を見ました。毎年見ているのですが、毎回、広島の小学生によるスピーチはいつも心に残ります。また、出席された外国人（国の幹部の人）の数にも驚きます。それを見て私は、世界にはこんなに平和を望む人がたくさんいるのだと思い、うれしく思いました。
　修学旅行では、長崎に行き、原爆資料館などで原子爆弾の惨さに触れました。原爆の熱線であらゆるものが溶けたり、なくなってしまう。それがほん

の一瞬でおきたのは、とても恐く悲しいことです。このような過去が日本にあるからこそ、日本は平和を目指して進んでいかなくてはならないと思わされました。そして、世界の国々が協力し合っているから、平和だと感じられている人がいるのだと思います。

しかし、紛争が起きているところは、まだまだ平和とは言えないと思います。何もしていないのにもかかわらず、紛争に巻き込まれ、怪我をしてしまう人、亡くなってしまう人。そんな人たちが世界にいる限りは、たとえ自分の周りが平和だとしても、本当に世界が平和になったわけではないと思います。世界中の人が平和に暮らして行けるように、戦争によって世界でたった一つの被爆国となった日本は、武力による争いを止めていかなければならない役割があると考えます。でも、それだけで本当に平和になるのでしょうか。たとえ武力による争いが絶えたとしても、人の心の中にある憎しみが消えなければ私は平和になったとは言えないと思うからです。少しのいさかいで少人数で収まればいいですが、そこにたくさんの人が巻き込まれてしまうのは悲しいです。もし、このような事がアメリカの周辺で起きてしまったら、アメリカの基地がある日本は、もしかしたら巻き込まれるかもしれません。そのようなことが起きないように、過去のあやまちを繰り返すことのないように世界の国々が協力し、世界中の人たちが思いきり笑えるようになった時。その時が「平和」と言える時だと思います。